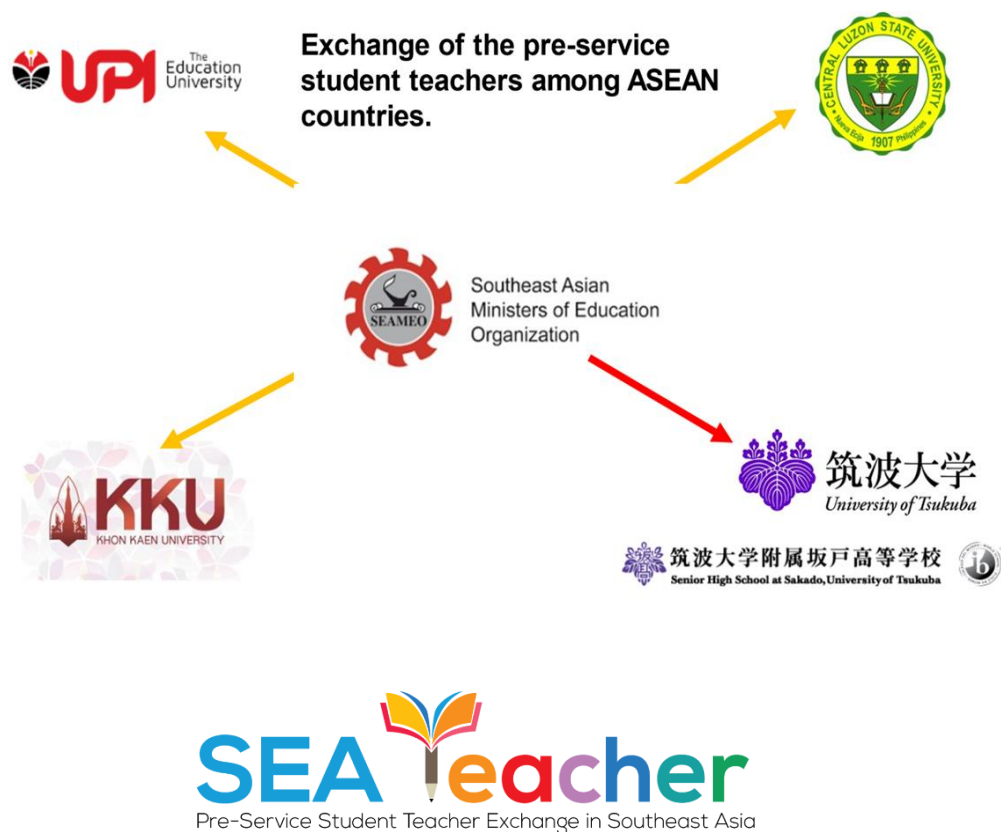


令和4年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
教職員交流を通じた国際比較研究事業

ESD for 2030 を担う教員養成のための 国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究



筑波大学・筑波大学附属坂戸高等学校

【 目次 】

はじめに.....	1
第1章 事業概要.....	2
第2章 実施組織およびこれまでの実績.....	3
2.1 組織概要および事業実施に係る運営体制及び役割分担.....	3
2.2 関連事業に関する実績.....	5
2.2.1 国内の連携機関と交流実績	
2.2.2 海外の連携機関と交流実績	
第3章 事業内容と計画	7
3.1 事業実施の背景.....	7
3.2 国際的な状況・我が国の先進的、特徴的な取組等.....	8
3.3 事業計画.....	9
第4章 教職員交流事業実施内容とその成果.....	12
4.1 海外3か国への教職員派遣事業の内容と成果.....	12
4.1.1 タイへの教員の派遣	
4.1.2 インドネシアへの教職員の派遣	
4.1.3 フィリピンへの教員の派遣	
4.2 海外3か国教員の日本招聘事業の内容と成果.....	45
第5章 成果の普及および今後の事業展開に関する課題と提言.....	51
5.1 成果の普及.....	51
5.1.1 日本国内にむけた成果の普及について	
5.1.2 海外にむけた成果の普及について	
5.2 今後の事業展開にむけた課題と提言.....	64
資料.....	67
資料1 本事業における比較研究に用いた文献	
資料2 令和4年度「新時代の教育のための国際協働プログラム」合同成果報告会での発表資料	
資料3 SEA-teacher 実習生作成学習指導案事例	
資料4 SEA-teacher 実習生評価表例	

はじめに

本校は平成8年度から海外での校外学習をスタートさせ、平成20年「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業、平成22年～24年「アジア隣人プログラム」助成事業、平成23年1月にユネスコスクール加盟、平成26年～30年「スーパーグローバルハイスクール事業」など、国際的な教育活動を展開してきた。この間、タイ、インドネシア、フィリピンの5校と連携協定を結ぶことができた。令和元年度「WWL(ワールドワイドラーニング)コンソーシアム構築支援事業」にも採択され、さらに国際的な教育活動を拡大しようとしたが、令和元年末から拡大した新型コロナウイルス感染症により、国を越えた人々の往来は大きく制限を受け、本校でも生徒の海外校外学習や海外連携校との相互留学などが全てできなくなった。令和4年度になって海外への渡航制限も徐々に解除されるようになった。国際的な教育活動は本校カリキュラムの柱の一つでもあり、できるだけ早期の海外交流再開を目指していた。

今回委託を受けた「教職員交流を通じた国際比較研究事業」は、「諸外国の豊かな経験を相互に学び合い、教育分野における諸外国との関係強化を図ることにより、多様化する教育課題に対する教育実践等の改善を目指す」とされている。本校は「ESD for 2030を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムの開発」をテーマとした。ESDの推進とSDGsの達成のためには、国を越え、生徒とともに自らもグローバル課題に当事者となって取り組むことができる教員を養成していくことが必要である。教職を志望する大学生が、海外の学校で教育実習を行い、授業実践や、現地の学校や教職員と学生時代に国際的なネットワークを構築できるような経験を積むことができれば、国際的な文脈をもつESDの推進とSDGsの達成に大きな意味をもつ。

本事業では延べ12名の教職員をタイ、インドネシア、フィリピンに派遣した。また、令和5年2月に実施した筑波大学附属坂戸高等学校(以下本校)の教育研究大会にあわせ、教職員を派遣したそれぞれの国から4名ずつ合計12名の教職員を招聘することができた。国によって課題に対する考え方や感覚が違っていることは当然であるが、オンラインの協議では十分に把握できない場合も多い。今回、約3年ぶりの対面交流となったが、顔を合わせて同じ空間を共有することが、言語化できない文化的な背景なども含めて相手を理解するために大切であるということを改めて認識することができた。

今回の交流事業を通じて、教員養成というテーマは各国共通の課題であり、国際協働教育実習はESDを推進できる教員養成にとって有効な手段であることが確認できた。本校においても、東南アジア教育大臣機構(SEAMEO)が実施しているSea-Teacherプログラムとの連携を中心としながら、我が国教員養成の海外展開に向けて積極的な役割を担っていきたいと考えている。

(筑波大学附属坂戸高等学校 校長 江前 敏晴)

第1章 事業概要

1.1 プロジェクト名称

ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究

1.2 事業期間

令和4年11月21日～令和5年3月15日

1.3 教員交流参加者の情報

(派遣) 12名 (高等学校教員11名、大学職員1名)

(招聘) 12名 (高等学校教員12名)

1.4 教員交流対象国及び機関名

<インドネシア>

インドネシア教育大学・インドネシア教育大学附属高等学校
ボゴール農科大学・ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校

<タイ>

コンケン大学・コンケン大学附属高等学校
カセサート大学・カセサート大学附属高等学校

<フィリピン>

セントラルルゾン州立大学・セントラルルゾン州立大学附属高等学校
フィリピン大学・フィリピン大学附属ルーラル高等学校

1.5 連携機関および交流関連機関名

SEAMEO (東南アジア教育大臣機構)

駐日インドネシア大使館

筑波大学附属学校教育局

筑波大学国際局

筑波大学 CRICED

筑波大学附属駒場高等学校

第2章 実施組織およびこれまで実績

2.1 組織概要および事業実施に係る運営体制及び役割分担

本事業は、国際教育実習が主要な事業であり、運営主体は教育実習が行われる附属坂戸高等学校が担った。事業全体のマネジメントは、附属学校の管理機関である附属学校教育局が、国際組織である SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）との連絡・調整や事業への支援・助言等は筑波大学国際局および CRICED（教育開発国際協力研究センター）が担った。

海外連携校との連絡・調整は、SEA-teacher プログラムにすでに参加している大学および附属高校については筑波大学が、SGH や WWL 事業で連携を深めている海外姉妹校については附属坂戸高等学校が行った。

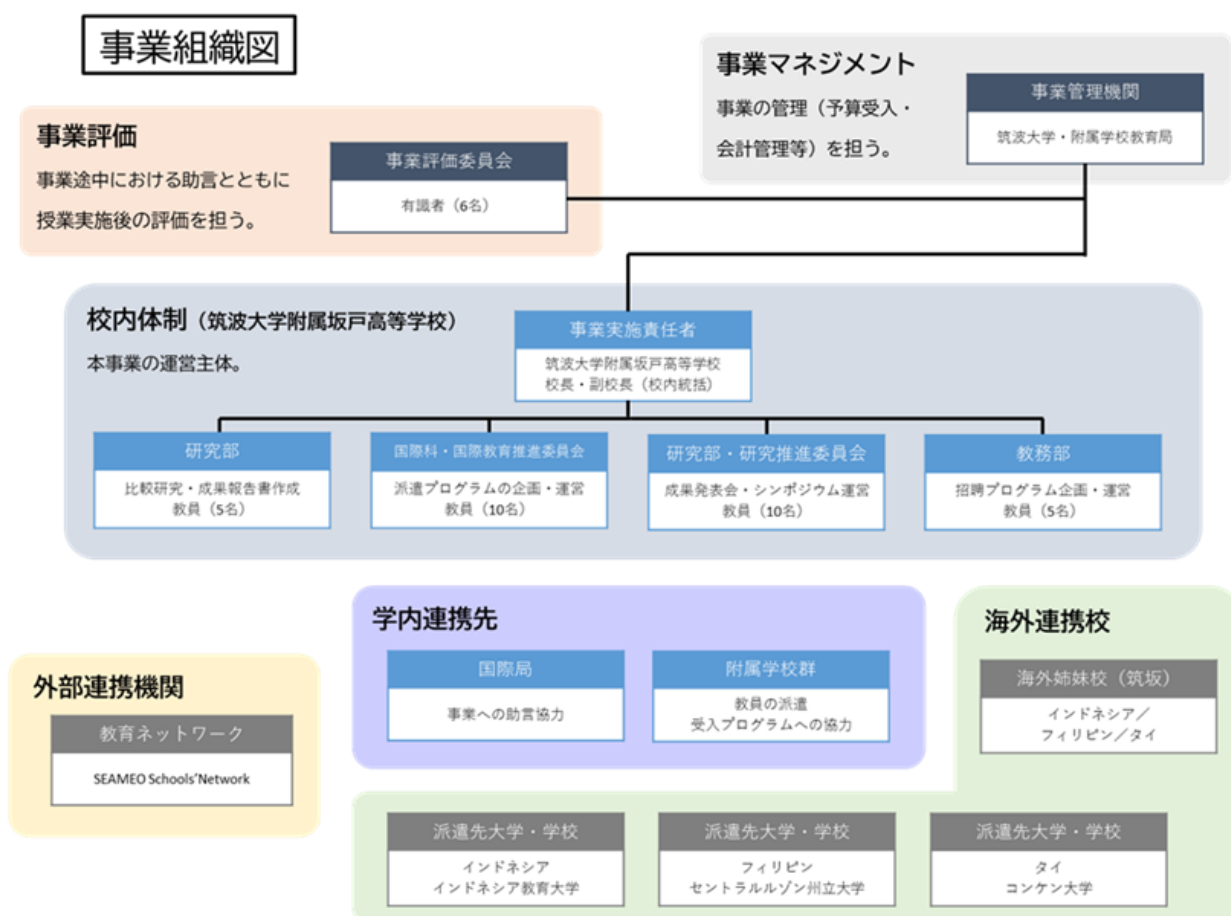


図1 事業組織図

表1 事業分担者一覧

名前	所属・職名	役割
溝上 智恵子	筑波大学附属学校教育局 教育長	事業管理者
江前 敏晴	筑波大学附属坂戸高等学校 校長	事業実施責任者
同上	同上	個人情報管理責任者
礪田 正美	筑波大学教育開発国際協力研究センター長 筑波大学人間系教授	SEAMEO 連携
野村 名可男	筑波大学国際局東南アジア台湾地域責任者 筑波大学 生命環境系 准教授	SEAMEO 連携
雷坂 浩之	筑波大学附属学校教育局 次長	附属学校群連携
深澤 孝之	筑波大学附属坂戸高等学校 副校長	筑坂校内統括
建元 喜寿	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭	姉妹校連携
Russell James Smith	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭 国際科主任	派遣先連携統括
Regina Ver Santos Mallari	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭 IBDP コーディネーター	派遣先プログラム担当 (フィリピン)
Arum Octaviani Hadi Mulyono	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭	派遣先プログラム担当 (インドネシア)
吉田 賢一	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭 フィールドワーク開発担当	派遣先プログラム担当 (タイ)
北野 啓子	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭 研究部長	比較研究・報告書作成担当
塗田 佳枝	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭 教務部長	招聘プログラム担当
Dr. Regidor Gaboy Dean	セントラルルソン立大学 College of Education	派遣先担当者
Dr.Maitree Inprasitha	コンケン大学 Vice President for Education and Academic Services	派遣先担当者
Dr. Ahmad Bukhori Muslim	インドネシア教育大学 Head of Office of International Relation and Education	派遣先担当者
Andri Sumaryadi	駐日インドネシア大使館	事業評価委員
佐藤 真久	東京都市大学環境学部 教授	事業評価委員
辻 耕治	千葉大学教育学部 教授	事業評価委員
石森 広美	北海道教育大学国際地域学科 准教授	事業評価委員
工藤 泰三	名古屋学院大学国際文化学部 准教授	事業評価委員
小清水 貴子	静岡大学教育学部 准教授	事業評価委員

2.2 関連事業に関する実績

2.2.1 国内の連携機関と交流実績

本学は附属学校を 11 校有し、それぞれの学校が特徴を持った教育活動を展開している。国際教育拠点としての実績としては、附属高等学校が SGH（スーパーグローバルハイスクール）の幹事校として、筑坂が WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業の幹事校として、全国の高等学校と交流を行ってきた。また、本学は、WWL および SGH ネットワーク事業の幹事管理機関を務めており、全国の高等学校の国際教育における連携・交流の拠点となっている。附属学校は各校とも毎年教育研究大会を開催し、教育研究成果の発信を行っている。本学附属学校には先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点の 3 つの拠点として教育活動を進めることが求められており、それぞれの特徴を活かしながら、国内各機関等と連携した教育実践を重ねている。

2.2.2 海外の連携機関と交流実績

本学は、2009 年から、日本唯一の共同機関（Affiliate Member）として SEAMEO に参画している。本事業に関連するものとしては、SEA-Teacher project への参加打診が 2016 年によせられ、本学の窓口機関である教育開発国際協力研究センター（CRICED）で、実施可能性を模索してきた。そして、2019 年度に筑坂においてタイ・インドネシア・フィリピンの 3 大学（本学大学間協定校から選出）から合計 6 名、パイロットプログラムとして受け入れをおこなった。具体的には、タイ・コンケン大学、インドネシア・インドネシア教育大学、フィリピン・セントラルルゾン州立大学から各 2 名である。

筑坂は、2008 年からアセアン各国との相互訪問を行っている。COVID-19 の影響が出る以前の 5 年間（2015 年度から 2019 年度）の実績としては、延べ人数で、インドネシアに 15 名、タイに 9 名、フィリピンに 8 名の教員を派遣し、インドネシアから 5 名、タイから 5 名、フィリピンから 8 名の教員の受け入れを行っている。2019 年には本学教員 2 名と筑坂教員 1 名がインドネシア教育大および附属高校を訪問しており、今後の連携強化について確認を行った。

SEAMEO は、加盟国内の小・中・高等学校を対象として、ESD に関する優秀な取組事例を、日本の文部科学省と連携し「SEAMEO-Japan ESD Award」として表彰し、域内の ESD の取組を促進している。SEAMEO Schools' Network を組織し、国を越えた交流も促進されている。優秀校には、日本訪問の機会を提供しており、筑坂にも訪問機会があった。日本では、高等学校における ESD の実践事例が小学校や中学校と比較し少なく、その取り組み内容も国内に視点を置いた活動が多い。連携先のインドネシア・タイ・フィリピンの学校は、SEAMEO-Japan ESD Award の受賞校ではないが、本学と筑坂が主催し 2012 年から実施している「高校生国際 ESD シンポジウム」において、毎年ハイレベルな発表を行っている。また、昨年度の「高校生国際 ESD シンポジウム」には、SEAMEO-schools network を通じて参加をはじめて呼びかけたところ、500 校程度から問い合わせがあった。このような活発な活動は日本ではあまり見られない。

2020 年 2 月には、筑坂の教員が、本学東京キャンパスで実施された「SEAMEO-Tsukuba Symposium VIII Education for Inclusive Growth of Society 5.0」において、「International Collaborative Learning Program from the Perspective of ESD and SDGs Through Case Study of Collaboration between Japanese and ASEAN High schools」

と題した発表を行い、日本と ASEAN 諸国の学校が連携した ESD や SDGs に関する取り組みを報告し、各国代表との交流を深めた。2020 年 12 月には、SEAMEO Schools' Network に筑坂が日本の学校としては初めて加盟を果たした。

2021 年 11 月に実施した「第 10 回高校生国際 ESD シンポジウム（オンライン）」では、SEAMEO-school network を通じて、シンポジウムへの参加を呼びかけ、465 校から問い合わせがあり、参加上限の関係から約 200 校の参加があった。その席で、各国の ESD に関連した指導者による分科会を設け、SDGs を軸にした探究活動への期待感がだされ、今後、各国の教育交流を深めていくことを確認した。

第3章 事業内容と計画

3.1 事業実施の背景

本事業は、国際的な視野をもって ESD に携われる教職員の育成を推進するため、国を越えた教育実習プログラム（プログラム名：SEA-Teacher project）を先進的に実施している東南アジア諸国の事例を研究し、日本の教職課程とそれに関わる教職員のグローバル化を推進していくことを目的とする事業である。ESD の推進と SDGs の達成のためには、国を越え、生徒とともに自らもグローバル課題に当事者性をもって取り組むことができる教員を養成していくことが重要である。

日本では、総合的な学習の時間（総合的な探究の時間）が、ESD や SDGs に取り組む中心的な学びのひとつである。日本の大学における教職課程において、2019 年度から「総合的な学習の時間の指導法」がコアカリキュラムに位置付けられ、すべての教職課程履修者が受講することとなった。ESD を担う教員養成が重要性を増しているなか、「総合的な学習の時間の指導法」が開始されたことは、日本の学校教育における ESD の推進に寄与することが期待される。一方で、「総合的な学習の時間の指導法」のみならず、教職課程全般において ESD の視点を取り入れた取り組みが必要であり、本事業では、特に教職課程の総仕上げといえる「教育実習」に注目する。

ESD は国際的な取り組みであり、ESD に関わる指導者は、国内的な実践だけではなく、日々の教育活動をグローバルな文脈と照らし合わせながら実践していくことも重要である。とくに、国際的な協働が重視される SDGs の時代においては、すべての教員がグローバルな視点を持つことを求められる。教職を志望する大学生が、海外の学校で教育実習を行い、授業実践や、現地の学校や教職員と学生時代に国際的なネットワークを構築できるような経験を積むことができれば、国際的な文脈をもつ ESD の推進と SDGs の達成に大きな意味をもつといえよう。

東南アジア諸国では、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）が主導し、2016 年から国を越えた教育実習が行われている（プログラム名：SEA-Teacher project）。その枠組みに、SEAMEO における国内唯一の提携機関（Affiliate member）メンバーである本学に参加の打診があった。各関連組織で調整をおこなったうえで、2019 年度に本学学生をインドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルゾン大学に各 2 名計 6 名派遣し、3 大学からも各 2 名計 6 名を附属坂戸高等学校（以下：筑坂）を受け入れ高校として、SEA-teacher パイロットプログラムとして双方向な形で実施された。プログラムに参加した 4 か国（日本、インドネシア、タイ、フィリピン）の大学生全員に、プログラム参加前および参加後に、BEVI（Beliefs, Events, and Values Inventory）によりプログラムの効果測定を行い、総じて、異文化受容性が高まっていることが明らかとなった（磯田・野村・建元・竹中，2020）。

教育実習の受け入れ機関である筑坂はユネスコスクールに加盟しており、スーパーグローバルハイスクール指定校、そしてワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校である。毎年、高校生国際 ESD シンポジウムを開催しており、アセアン各国との強いネットワークを有している（Tatemoto, Y., 2020）。インドネシアの高等学校の教員と協働した ESD プログラムの開発を行っており、さらに、プログラム参加

による高校生の変容についても、半構造化インタビューを用いた質的探索的調査により明らかにしている（建元・大川，2022）。

東南アジア諸国で実施されている国際協働教育実習が日本国内に広がっていけば、国際的な文脈におけるESDを担える教員養成が進み、日本の教員養成をグローバルに変革していく大きなインパクトを与える可能性がある。そこで、実際に、この先進的な教育実習に関連している学校を中心に教職員同士が交流を行い、各国の国際協働型の教育実習の学校現場での運営方法や、教職員への効果を調査研究、共有し、とくに日本の教職課程担当者や学校教育現場に研究内容を発信、共有することができればSDGs時代に対応した教員養成を進めることができると考え、本事業の立案に至った。

註

磯田正美・野村名可男・建元喜寿・竹中絵美（2020）. SEA-Teacher パイロットプログラム実施報告書（2019年度実施）

Tatemoto, Y. (2020). Building International Learning Networks for ESD and SDGs: A Case Study of Collaboration Among High Schools in Japan and ASEAN. *Journal of Southeast Asian Education*, 2, 99–108.

建元喜寿・大川一郎（2022）. 海外研修体験における日本人高校生の変容プロセス：インドネシア農村部におけるフィールドワークに焦点を当てて、ESD研究，5，41–49.

3.2 国際的な状況・我が国の先進的、特徴的な取組等

SEA-Teacher project は、ASEAN の教育関係統括国際組織である SEAMEO が 2015 年に企画し、2016 年より実施する ASEAN 域内各国大学間交換教育実習 (internship program) である。参加大学では、SEAMEO による年 2 回の推進会合のもとで交換実習を実施しており、大学間協定に応じては各国の教育実習単位にも換算されるプログラムとして、すでに通常運用されている。

SEAMEO における国内唯一の提携機関 (Affiliate Member) である本学には、当初より参加打診があり、その窓口機関である教育開発国際協力研究センター CRICED (Center for Research on International Cooperation in Educational Development) では、その参画を模索し、国内教育実習先の確保、経費負担、受け入れ学生の生活支援、派遣学生のための事前指導、授業整備等が課題となることがわかった。また、実習が日本の教員免許法上の教育実習に該当しないなどの難しさが課題となった。国際協働教育実習が、アジア地域から各国に広まれば、各国が連携した ESD の推進にも大きく寄与するであろう。一方で、各国の教員免許に関する法規や教育課程は異なっており、正規の実習として認められていくには、試行的に事業を積み重ねていく必要がある。

そこで、2019 年度に筑坂においてタイ・インドネシア・フィリピンの 3 大学 (本学大学間協定校から選出) から合計 6 名、SEA-Teacher project として受け入れをおこなった。筑坂は総合学科であり、普通科目、専門科目の多様な科目を有しており、他の高等学校で実施する場合にも参考となりうる。同パイロットプログラムでは、英語の授業だけではなく、理科、地歴公民科、家庭科、農業科、総合的な学習の時間を各国の学生が担当し、英

語による学習指導案を作成したうえで、授業を実施した。さらに、生徒の探究活動に対する指導も得られ、地域をテーマにした内容であっても、各国の視点から SDGs に関連したアドバイスを受け、内容がより深化したものとなった。教育実習の指導担当教員は、受け入れた大学生からその国の視点や探究方法について新たな視点を得ることができた。受け入れ期間中に、総合学科研究大会が実施され、全国から集まった教員から、国際教育実習へ大きな関心が示された。指導を受けた日本人高校生の振り返りからも、国を越えた教育実習に対する評価は非常に高く、他校における実施にも期待を持てるものであった。

3.3 事業計画

・事前調査

新型コロナウイルス感染症の拡大によって、2020年度、2021年度は SEA-Teacher project は実施されていない。2022年度は実施される見込みで、今年度の規模や地域等について調査を行う。また、派遣先での協議会の資料とするため 2016年度～2019年度までの実績（教育実習への参加学生への感想等を含む）等の実習内容の詳細について調査する。あわせて、協議会参加教員以外の教員も含めて、事前に国際協働教育実習に関する考え方等についてオンラインによる調査を実施し比較研究の資料とする。派遣前に筑坂の担当者と派遣先担当者とのオンラインによる打合せを実施する。

・教職員交流プログラム

各国の教育課題にはそれぞれ違いがあっても、ESDの推進とSDGsの達成にむけて人材を育成していくことは共通の課題である。探究学習の指導をはじめ、グローバルイシューを自分事としてとらえ、主体的に課題を解決していく人材を育成するためには教員養成段階においてもそれを意識した学びの機会が必要である。SEAMEOが主導して行っている国を越えた教育実習「SEA-Teacher project」は、まさにグローバル時代に対応できる教員養成に寄与するものと考えられる。日本においては海外の学校における教職実践の実習活動について免許法上の教育実習として認められていない。ただ、海外での教育実習を経験することはSDGsの達成にむけた人材育成を支える教員養成に大きな意味を持つと考えられる。将来的に日本においても海外での教育実践活動が教育実習の単位として認定されることを念頭に、次にあげる比較研究のための協議会を実施する。協議会はSEA-Teacher projectによりすでに教員の受入を行っている学校、学生を派遣している大学、本学附属学校教員の3者により実施する。

- ・教員養成課程における教育実習の役割について、日本と派遣先国の比較を行う。派遣教員から日本の教育実習の役割、実施方法や実施期間などについて発表・紹介する。また、派遣先の担当者から派遣国の教育実習のあり方について発表・紹介をいただく。
- ・派遣先大学（学校）の教職課程教員から、海外協働教育実習に参加した学生について、教員としての資質・能力のどのような部分が伸張されるのか具体的に紹介いただく。可能であれば、海外協働教育実習に参加した経験のある教員にも協議会に参加してもらう。
- ・派遣教員のうち数名が派遣先の学校において、ESDに関連した特別の授業を実施する。派遣教員が海外の学校において授業を行うことで、模擬的に教育実習を体験する。そ

の実践から得られる気づきを参加教員で共有する。今回の比較研究では海外における教育実習をテーマとしている。本テーマを考えるに当たって、海外での教育実践（今回は特別授業）がどのようなものか、派遣教員自身が具体的なイメージを持つことは協議会を進める上で必要と考えている。

・教員養成を切り口にした日本および派遣国の教育課題について相互に発表・紹介する。

協議会は以下の通り 3 カ国で実施する。協議には学校・大学から 2～4 名の参加者を募る。派遣教員は協議の前に、各 SEA-Teacher project 受入校を訪問し、児童・生徒の学習の様子などを視察するとともに、特別授業を行う。派遣教職員は 20 名程度を予定している。

国名	協議参加大学・学校
インドネシア	インドネシア教育大学附属高等学校（SEA-Teacher project 受入校） インドネシア教育大学
フィリピン	セントラルルゾン州立大学附属高等学校（SEA-Teacher project 受入校） セントラルルゾン州立大学
タイ	コンケン大学附属学校（初・中等学校）（SEA-Teacher project 受入校） コンケン大学

また、本事業では SEA-Teacher project 受入校 3 校、筑坂海外姉妹校 3 校から教員を招聘し、次にあげる交流・研修・発表を実施する。

- ・日本の教育現場の理解を図るため、本学附属学校群のうちいずれかの学校を視察していただく。
- ・招聘者が筑坂において ESD に関連した特別の授業を実施する。
- ・国を越えた国際協働教育実習について公開シンポジウムを実施する。シンポジウムは附属坂戸高校研究大会の一つのセッションとして開催し、派遣教員による研究報告等もあわせて行う。

招聘予定は 12 名程度を予定している。

本交流事業により、海外協働教育実習が ESD の推進のための人材育成に資するものであることを実践も含めて評価する。また、日本の教員養成課程および教育実習のあり方を派遣先の教育実習の課題の共有などを含めながら比較することで客観的な視点により評価する。地球市民としての感覚を持った教員養成については、グローバル化の急速な進展にもなって、その必要性は高まっている。ただ、日本の教員養成は、「総合的学習の時間の指導法」が必修化されたが、基本的には教科教育を柱として構成されており、学校における ESD の推進と SDGs への関わり方について取り上げられることは少ない。また、日本における教育実習も同じように教科教育の指導が中心で、SDGs などを総合的・探求的に指導する経験はあまり多くない。これは日本の教員養成の課題でもある。その点において海外協働教育実習は改善策の一つと考えられるが、各国の教員養成・教育実習のあり方からそのような日本の教員養成の課題に対する何らかの改善点・解決策を探ることができるのではないかと考えている。

新型コロナウイルス感染症の再拡大により渡航が困難になり、派遣事業が実施できない

場合、また海外から教職員を招聘できない場合は、オンラインにより実施可能な範囲で事業を行う。筑坂ではこれまでに、インドネシア・タイ・フィリピンの連携先の各学校とオンラインでの活動実績があり、オンライン会議の環境に関して特に問題ないと判断している。また、筑坂では毎年、高校生国際 ESD シンポジウムを開催している。コロナ禍においては海外ともオンラインにより実施した。感染状況により、実施可能な内容は限定されることが考えられるが、オンラインで可能な交流事業（教育実習に関する発表・紹介および国際協働教育実習に関する意見交換等）は実施する予定である。

第4章 教職員交流事業実施内容とその成果

4.1 海外3か国への教職員派遣事業の内容と成果

事業開始時期が11月下旬にずれ込んだため、一部、派遣日程の変更や派遣人数の変更はあったが、事業計画通り3か国に教職員を派遣することができた。COVID-19が発生以降、初の海外派遣となった。オンラインによる事前の交流・調査に加え、対面による交流、そして対面交流とオンラインの双方を活用したハイブリッド型の交流で、これからの教職員交流の在り方を見出すことができた。

各国における実施内容とその成果について、現地における参加者の発表内容やレポートにより報告する。なお、各国への派遣メンバー及び派遣期間は以下のとおりである。

[タイ]

派遣期間：令和4年12月11日（日）～令和4年12月15日（木）

派遣先：コンケン大学・附属高等学校、カセサート大学附属高等学校

派遣メンバー：吉田賢一、渋谷陽介、梅澤 智、渡邊和彦、北野啓子

[インドネシア]

派遣期間：令和4年12月21日（水）～令和4年12月27日（火）

派遣先：インドネシア教育大学・附属高等学校

ボゴール農科大学・附属コルニタ高等学校

パクアン大学、アルアザール19チラチャスイスラミック高等学校

派遣メンバー：建元喜寿、高橋 裕、西村栄哉、Arum Mulyono（附属坂戸高等学校）

高畑麻莉恵（筑波大学東京キャンパス事務部学校支援課）

[フィリピン]

派遣期間：令和5年3月6日（月）～令和5年3月9日（木）

派遣先：セントラルルゾン州立大学・附属高等学校

フィリピン大学・附属ルーラル高等学校

派遣メンバー：建元喜寿、吉田賢一

4.1.1 タイへの教員の派遣

・タイ訪問時の Meeting Agenda



Meeting agenda

1. Purpose of our visit.
2. Campus / school introduction: UTSS (Senior High School at Sakado, Univ. Of Tsukuba)
3. Campus / school introduction: Demonstration school of Khon Kaen University.
4. Review and reflection of SEA-Teacher project at Sakado in February 2020.
5. Interviews: the impact of SEA-teacher project on teachers and students at Demonstration school of Khon Kean University.

Expected interview questions.
What are the positive impacts on teachers by accepting SEA-T?
What are the positive impacts on your students?
What are the positive impacts on the whole school?
What are the challenges against the supervision and implementation of SEA-T project?
Based on your experiences, what suggestions do you have for UTSS?

6. Invitation to the Open Research Forum 2023 in February.

2 (two) teachers will be invited to this forum. Travel expense will be covered by UTSS.

*Contact person

Kenichi Yoshida/Mr.

Department of social studies / IBDP coordinator

Email: yoshida.kenichi.gm@un.tsukuba.ac.jp



図 2 コンケン大学附属高等学校にて



図 3 カセサート大学附属高等学校にて

○教員交流参加者（日本人教員）の海外連携校における発表資料

@コンケン大学附属学校スクササート校にて

2020年2月に本校が受け入れたSEA-Tの様子を紹介し、受け入れ経験豊富なコンケン大学附属高等学校の教員から受け入れに関してアドバイスをもらった。

SEA-T 2020 @ Sakado

Kenichi Yoshida
Dept of Social studies / IBDP coordinator

General information

No of students	Country	University	Teaching subject
2	Thai	Khon Kaen University	English
2	Indonesia	Indonesia University of Education	Biology Chemistry
2	The Philippines	Central Luzon State University	Social studies Ethics

- (1)Period of stay at Sakado: 2 weeks
- (2)Number of teaching hours / practice: 11 lessons
- (3)Accommodation: dormitory in the school.









Questions on implementation of the SEA-T

1. Do you think that 11 teaching-hours are enough for the SEA teachers to practice?
2. Do you have any guidance before the internship gets started?
3. Do you have any "reflection sheet"?
4. After the internship program, do you have any follow-up or support program for the SEA teachers?

○海外派遣事業参加教員（日本人教員）の成果報告

「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」 タイ教職員交流プログラムに参加して

筑波大学附属坂戸高等学校
教諭 梅澤 智

I. はじめに

「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」タイ教職員交流プログラムに、2022年12月11日から15日の5日間の日程で参加した。筑波大学附属坂戸高等学校（以下、筑坂）では、「総合的な学習の時間／総合的な探究の時間」に相当する「T-GAP：Tsukusaka-Global Action Program」や「卒業研究」などのコア科目を中心に、ESDの推進と2030年のSDGs達成に向けた探究学習に取り組んでいる。加えて、SGHの研究開発科目である「グローバルライフ」では、グローバルイシューを自分事として捉え、よりよい社会をデザインしたり、主体的に社会課題を解決したりしていくことのできる人材の育成に努めている。

このことから、私は「卒業研究」や「グローバルライフ」の担当者として、また、農業科の教諭としてESDやSDGsの達成に向けた人材育成を、カリキュラムや教科教育の中でどのように位置づけたら良いのか、自身の筑坂での経験とタイでの実態を比較・調査することを個人的な参加目的とした。加えて、今年度、3年次のクラス担任をしていることから、タイにおける進路指導や「SEA-Teacher project（以下、SEA-T）」を経験した教員が果たす役割を明らかにすることを目的とした。

II. コンケン大学での教員養成およびコンケン大学附属高等学校での教育に関して

SEA-Tは、2016年から東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）主導で開始され、筑坂では、2019年度にコンケン大学より2名を受け入れている。コンケン大学では、筑坂の他にも多くのSEA-T派遣実績のある先進的な大学である。今回、私はコンケン大学での教員養成、なかでもSEA-T経験者のその後等に焦点をあてた調査を実施した。



写真1 コンケン大学の学生（教育実習生）による附属高等学校での Thai (Language) の授業

SEA-T を経験した多くの学生は、大学卒業後、教員や教育系諸機関・企業等へ就職することが多いようである。なかでも、教員となる者は全国の公立・私立の学校で働いているということであった。しかしながら、SEA-T を経験した教員のキャリアや授業内容へのポジティブなインパクトについては追跡調査されていないという実態もわかった。大学側だけでなく参加した学生側の調査も、今後、必要になってくるものと考えられる。

コンケン大学附属高等学校では、実際の授業の様子を見学することができた。「Thai (Language)」や「数学」「英語」の授業等を見学したが、すべての授業において、教員がタブレットを活用していたことが印象に残っている（写真3）。PPT を用いて、実際にスライド上に書き込みながら図形の学習を行ったり、アニメーションや動画を用いて語学の学習に取り組んだりしていた。生徒らにおいても、机上には教科書とノートの者もいれば、タブレットで授業内容を確認しながら直接書き込んでいる者の様子もみられ、全校として ICT 教育がかなり普及しており、かつ生徒の実態にあわせて紙媒体も併用しながら、効果的に活用されていると感じられた。

また、全校で SDGs を意識した探究活動に取り組む様子も調査することができた。写真4は、廊下に掲示されていた生徒による「呼びかけ」ポスター類である。ポスターの掲示数や種類が多いわけではなかったが、生徒による他の生徒や教職員、あるいは社会への「呼びかけ」を目的としているとのことであった。

筑坂では、全員が PC を購入して入学しており、授業等においてデジタルデバイスを積極的に活用する機会が多い。加えて、各教科・科目をはじめ教育活動全体で社会課題解決を目指した探究活動に取り組んでおり、コンケン大学附属高等学校との親和性の高さを実感した。一方で、今回の調査では、どの程度、ESD や SDGs を意識して探究活動に取り組んでいるのか、カリキュラムのなかで探究や ICT 活用がどのように位置づけられているのか、等の詳細は明らかにすることができなかった。したがって、引き続きの交流が必要なものと考えられる。さらに、SEA-T により両国で教育実習をすることで、それぞれの学校でインパクトを与えることができる日常が発生すれば、教員養成としても、探究学習の成果としても、大きな価値を生むことにつながるものと考えられる。



写真2 附属高等学校教諭による ICT を活用した数学の授業の様子



写真3 廊下に掲示された「呼びかけ」の掲示物

Ⅲ. おわりに

コンケン大学附属高等学校では、探究や ICT 活用分野において大学附属学校だからこそ可能な、先駆的取り組みが随所にみられた。とくに探究学習においては、SDGs を意識した授業を設計している印象を受けたが、さらに詳しく調査する必要性も感じている。加えて、SEA-T がコンケン大学と日本の大学附属学校間で実施されれば、探究や ICT 活用において既習のスキルを言語として、教育実習生と高校生がより具体でローカルなグローバル 이슈にアクセスでき、世界規模で活躍する人生観を養うことができるものと推察する。SEA-T の意義と価値を日本において普及させ、1 校でも多くこの取り組みに参画することが、当面の課題であると考えます。

最後に、今回、こうした貴重な機会を提供してくださった皆様、そして、心から歓迎し、SEA-T や校内での取り組みをご教授くださったコンケン大学およびコンケン大学附属高等学校の皆様はこの場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」
タイ派遣報告書

農業科教諭 渋木陽介

「授業は問いが大切。知識の暗記よりも思考力を伸ばす教育が重要な。私達、教員が思考力を深める問いを設定し、対話する授業が良いと思うわ。」コンケン大学付属学校の外国語の先生の言葉が印象に残った。日本の学習指導要領の改訂で重要視されている「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」を私達、高等学校教員は、研鑽を重ね、授業に取り組んでいる。それと同様にコンケン大学付属学校の先生も実践していた。情報化やグローバル化といった社会的変化は、様々な国で起きており、それぞれの教育現場でこれからの社会に求められる資質・能力を育成している。ASEAN 諸国の学校との国際的なネットワークの構築は、ESD の推進し、グローバル人材の育成に大きく貢献することを確信した。

今回のタイ派遣では、海外協働教育実習の貴重な経験とコンケン大学付属学校の生徒の現状や先生方の熱心な教育活動を聞き、授業を見学する貴重な機会を頂いた。これらの見聞から日本の大学生がタイへの海外教育実習に取り組む意義を考察していきたい。



コンケン大学付属高校での協議会の様子

1, 異文化理解力の向上

コンケン大学付属高校の先生方との協議会の中で、海外教育実習を実習生が成功させるポイントとして「タイへの適応力」が挙げられた。現地に数週間滞在し、教育実習に取り組むことは、語学力のみならず、異文化理解力も重要である。

異文化理解力とは「育った環境や価値観が異なるヒトと働くときに、行き違いや対立をさげ、確かな信頼を築く技術 (エリン・メイヤー2015)」である。異文化理解力を構成する要素については様々な

考え方があがるが、見館（2020）は、好奇心（未知のことに好奇心を持ち前向きに取り組むことができる）、オープンマインド（オープンで柔軟な思考力を持つ）、アサーティブネス（相手を尊重しながら、自分の意見を伝える）、失敗力（自分の失敗を許せる。失敗を恐れず挑戦する。）、判断力（即断即決をせず、冷静に状況を見て、判断できる。）グリット（情熱を持って持続的に努力し、最後までやり遂げる）と整理している。実習生は教育実習での様々な場面でタイの先生方、生徒と交流し、与えられた業務を行うことで先に挙げた異文化理解力の要素を向上させていく。さらに長期間の滞在は業務外での日常生活においても現地の人との交流は避けることはできない。このような状況の中、実習生は自らの異文化理解力を自らの力で向上させていくことが期待できる。

2. 豊かな教職経験

コンケン大学附属高校の教育実習の捉え方や指導方法は日本の教育実習とほとんど変わらなかった。教育実習の期間は2週間であり、約11コマを実習生は担当する。授業計画、実施、ふりかえりを2週間の実習期間中に行う。コンケン大学附属高校の先生は放課後の実習生とのふりかえりの時間を重視し指導をしていた。実習生への指導が丁寧であるという印象を持った。

交流会にて、スマートフォンの普及による高校生の変化について質問をした。タイの高校生のスマートフォンの利用頻度は高く、日本の高校生と同様である。しかし、学校の中でスマートフォンの使い方についての指導は行われてはいない。情報化社会において学校の授業は変化し、スマートフォンの長所を活用した授業が大切だという考え方である。授業見学の際、生徒たちの机上にはノートパソコン、スマートフォン、タブレットなど生徒それぞれに応じたデバイスとテキストと筆記用具が置かれていた。先生方は、ロイロノートを使用したインタラクティブな授業、パワーポイントで調べ学習の発表授業、デジタル教材を活用しながらもテキストに書き込む等それぞれの教材の長所を生かした授業の工夫がされていた。また、コロナウィルス感染防止対策のため生徒が登校できない期間は、オンライン配信授業をそれぞれの先生が工夫して行っていたと聞いた。社会の変化に合わせてより良い技術や考え方を肯定的に捉えて活用していく早さは日本の学校教育の現場と比べものにならないのかもしれない。

教育実習は大学で履修してきた科目の学習成果を実地に適応し、体験を通して実践的な力を習得するのがねらいである。また、教える技術を学び、生徒とふれあいや指導教員との協働から人間関係をつくっていく場でもある。タイと日本の両国で教育実習を行えば、実習生は両国の長所を生かした教育実践の力が向上し、両国の教育現場で豊かな人間関係が構築されるだろう。そして、タイと日本の学校教育現場の共通点や相違点を理解し、両国の実態にあったESDの推進のあり方を見出すことができるかもしれない。



コンケン大学附属高校数学の授業の様子

以上のことから、日本の大学生がタイ国にて教育実習を行う意義は、実習生の異文化理解力を向上させ、豊かな教職経験により、ASEAN 諸国の学校との国際的なネットワークの構築を担う人材育成につながると考察した。私自身も研鑽を重ね、微力ながら、ASEAN 諸国の学校とのネットワークの構築に貢献する教員として精進していきたい。

参考文献

エリン・メイヤー (2015) 『異文化理解力—相手と自分の真意がわかる ビジネスパーソン 必須の教養』 英治出版.

見館好隆 (2020) 「課題解決型海外インターンシップが異文化理解力にもたらす効果とその規定要因」 日本ビジネス実務論学会『ビジネス実務論集』2020年 38 巻 p. 43-52.

「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」

コンケン大学附属学校への訪問から考える SEA-Teachers の可能性と課題

地理歴史科教諭 渡邊和彦

2022年12月に教員研修の一環で訪問したコンケン大学附属学校での意見交換と学校の視察から、SEA-Teachersの可能性と課題について、教員個人に与える影響に焦点を絞って考えてみたい。

SEA-Teachersを受け入れることは、受け入れる教員が所属する学校あるいは国家に固有の学校文化をメタ認知できるという意味で可能性をもつと考える。コンケン大学附属学校の教職員との意見交換では、他国の教育実習生を受け入れることで、国による学校文化の違いを意識できることが示唆された。教育は児童生徒の成長を目的とする点において世界共通の目的意識を有しているだろうが、そのための教育内容や指導の方法、学校運営の方針は国によって多様である。教員は、他国の教育実習生を指導することを通して自国と他国の学校文化の違いに触れ、自国の学校文化をメタ認知していくだろう。SEA-Teachersを受け入れていくことは、自国の学校文化のメタ認知を促すという点で、従来の教育実習生の指導とは異なる省察の機会を提供すると考える。

一方で、SEA-Teachersの受け入れを巡っては、大学と受け入れ校の連携が今後課題になると考える。教員が他国からの教育実習生を指導するという体験を振り返り、教員としての経験値を高めていく過程では、大学の教師教育研究者も交えた組織的な研修の場が必要になるのではないだろうか。これは、他国からの教育実習生の学びの振り返りにも同様のことが指摘できるだろう。他国からの教育実習生を受け入れることが、教員、実習生の双方に学びがあるものになるよう、事後指導の充実が求められる。

最後に、このような教員研修の機会を与えてくださった関係者の皆様、現地で快く案内して下さったコンケン大学附属学校、カセサート大学附属学校の教職員の皆様に心から御礼申し上げます。



バンコクにて (12/12 撮影)

4.1.2 インドネシアへの教職員の派遣

○コルニタ高校における発表資料（令和4年12月22日）

Preface

This presentation is delivered at Kornita SHS during the ACCU program visit.

The presentation was done by Arum Mulyono, Nishimura Haruya, Takahashi Yu and Takahata Marie.

Content

1. Delegates' introduction
2. Quiz
3. A brief introduction about our school.
4. SEA-teacher program: a super brief introduction

Delegates

1. Tatemoto sensei
2. Takahashi sensei
3. Nishimura sensei
4. Arum
5. Takahata-san from the university of Tsukuba
(representative)

Delegates' introduction (自己紹介)

1. Name
2. Hobby
3. Favorite Japanese food/anime/ or others
4. First impression about Indonesia

Question 1

UTSS/ SMA Sakado is located in Tsukuba, Ibaraki Prefecture.

- A. True
- B. False

Question 2

SMA Sakado offers Bahasa Indonesia classes.

- A. True
- B. False

Question 3

Ina sensei was the first student from SMA Kornita participating the exchange program at SMA Sakado.

- A. True
- B. False



SMA Sakado
UTSS: a brief introduction



SMA Sakado

1. English name: UTSS (University of Tsukuba Senior High School at Sakado)
2. Located in Saitama prefecture, 45 minutes away from Ikebukuro, Tokyo.
3. Public school
4. Number of students: around 420 students



What are unique about our school?

1. Non-uniform policy
2. Diversity
3. IB-DP Program
4. Semi-vocational

Non Uniform Policy



Diversity



IB-DP Program



筑波大学付属嵐山高等学校 国際バカロレア (IB) 説明会 (10/1) のお知らせ - 筑波大学附属嵐山高等学校



国際バカロレア【IB】オンライン説明会 (10/1) のお知らせ - 筑波大学附属嵐山高等学校



インタビュー記事】筑波大学付属嵐山高等学校の特色や保護生にとっての魅力とは？ | 海外子女向けオンライン家庭教師のEDUBAL

国際バカロレア認定校の学びとは？ 筑波大附属坂戸高の授業をのぞいてみた | 海外大進学という選択 朝日新聞EduA [Visit](#)

筑波大学附属坂戸高等学校 [Visit](#)

国際バカロレアコース (留コ) 筑波大学附属坂戸高校 | 埼玉新聞社 高校受験ナビ [Visit](#)

Semi-vocational

Semi vocational

1. [Agriculture and environment](#)

3. Welfare and human science

2. Industry and information

4. Business and International



Southeast Asian
Ministers of Education
Organization

SEA—TEACHER

- The SEA Teacher Project or the "Pre-Service Student Teacher Exchange in Southeast Asia"
- Aims: to provide opportunity for pre-service student teachers from universities in Southeast Asia to have teaching experiences (practicum) in schools in other countries in Southeast Asia.
- The duration is for one month and based on the mechanism of cost sharing basis.
- Requirement: 4th year students whose major are in math, science, English and pre-school.
- Participants can observe, assist in teaching, teach and reflect).

○インドネシア教育大における発表資料（令和4年12月23日）

ACCU(Asia-pacific Cultural Centre for UNESCO)Project

"Developing teachers who can take on "ESD for 2030" through sharing experiences SEA-teacher pilot program between laboratory schools"



Yoshikazu TATEMOTO

Yu Takahashi, Arum Octaviani Hadi Mulyono, Haruya Nishimura
(Senior High School at Sakado, University of TSUKUBA)

Why we visited UPI today

- ACCU invited proposals for projects on international collaboration among teachers especially ESD and SDGs
- TSUKUSAKA applied the project related the SEA-teacher programme

Awareness of the issues for ESD and SDGs

- In Japan, there is a shortage of teachers who can take on global education and ESD for 2030.
- SEA-T is one of the solutions.
- Embracing SEA-T is a way of internationalizing schools.
- We would like you to share your school's experience of SEA-T for promoting SEA-T in Japan.

TSUKUSAKA Global Education and ESD



ESD symposium



International Field work
in Indonesia

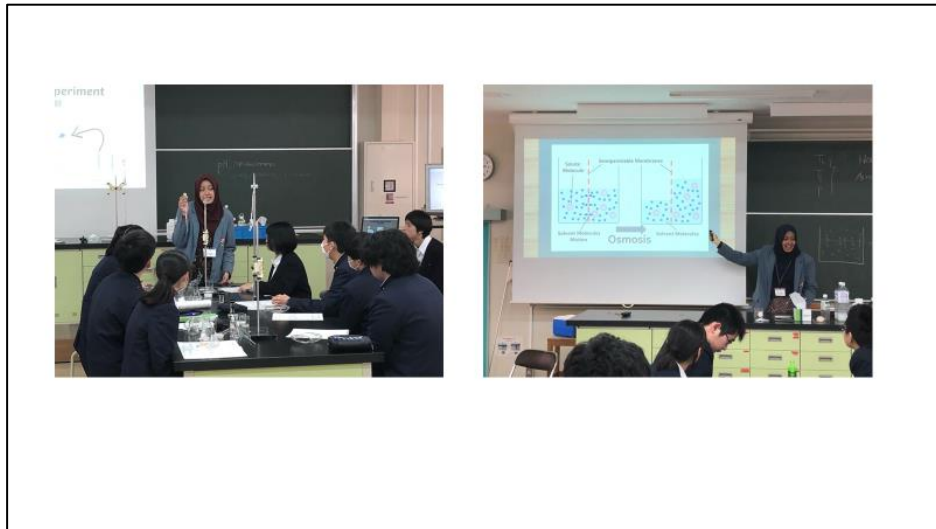
REVIEW

SEA-T Pilot Project @TSUKUSAKA 2020

General information

No of students	Country	University	Teaching subject
2	Thai	Khon Kaen University	English
2	Indonesia	Indonesia University of Education	Biology Chemistry
2	The Philippines	Central Luzon State University	Social studies Ethics

- (1) Period of stay at Sakado: 2 weeks
- (2) Number of teaching hours / practice: 11 lessons
- (3) Accommodation: dormitory in the school.



Question & Discussion

•SEA-T @ UPI

- 1) Accepted subjects
- 2) Acceptance period
- 3) How high school teachers get involved
- 4) How to determine the teachers in charge
- 5) Impacts of accepting SEA-T on teachers.
- 6) Impacts of accepting SEA-T on students
- 7) Comments on the acceptance of SEA-T (freely)

Invitation to Japan(Schedule)

• 8th Feb,2023-12th Feb,2023

8th Feb: Arriving at Japan and orientation

9th Feb: Visiting lab. School of TSUKUBA University in Tokyo

10th Feb: Lesson study

11th Feb: Symposium

12th Return to each country

Invitation to Japan (What we look for in participating teachers)

• 8th Feb,2023-12th Feb,2023

1. ESD and SDGs initiatives (each subject, integrated study, school events, etc.) in your school
2. Teacher training for ESD and SDGs in your schools
3. Examples of cooperation with schools abroad
4. Teaching practice
5. SEA-Teacher program in your school (If your school have one)

10-minutes presentation of the information number 1-5

Terima kasih banyak

Hatur nuhun

ありがとうございました

「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」
インドネシア教職員交流プログラムに参加して

筑波大学附属坂戸高等学校
理科教諭 西村 栄哉

I. はじめに

インドネシア教職員交流プログラム及び SEA-Teacher の実習指導を通して得られた所見を以下に記す。

II. 教員の交流

プログラムの実施期間中、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校とインドネシア教育大学附属高等学校、アルアザール 19 チラチャスイスラミック高等学校の3校を訪問し、学校施設の見学や教職員との交流をおこなった。特に、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校では、育てたい生徒像を踏まえた教科指導や生徒指導の実際について情報交換をおこなった(写真1)。コルニタ高校の教職員からは、本校の生徒が科目選択を通して自身の将来像を描いていく過程を如何に指導するのか、また生徒の多様な実態に合わせた指導を展開するためにどのような準備・対応をおこなっているのかといった点に関しての質問が相次いだ。その中では、教員が自身の役割をどのようなものであると認識し、また生徒と関わる際の立ち位置をどう設定するかといった「教員像」に関する議論ができた。



写真1 ボゴール農科大学附属高校における教員交流の様子

III. SEA-Teachers の受け入れ

今年度の本プログラムでは、インドネシア教育大学から数学・社会(公民)・理科(化学)の教育実習生計3名を受け入れた。特に、理科(化学)の実習生は「化学基礎」「化学 α 」の授業だけでなく、私のホームルーム(2年B組)でも指導を担当した。

理科授業に関する指導では、すごろくゲームを援用した「化学基礎」の授業において、生徒に「楽しい」と感じてもらうことを志向するにしても、ただ遊びとして「楽しい」のではなく、理科の授業として科学的に「楽しい」と感じてもらえるような工夫が必要であるといったフィードバックもおこなった。また、気体の状態変化を取り扱った「化学 α 」の授業において、「生徒が実験の意味を理解できていなかったように感じたが、どうすべきだったか」と振り返る実習生に対して、実験・観察を

中心とした授業展開するためには、「導入」において演示実験などを活用しながら学習の文脈を設定することが肝要であるといったフィードバックをおこなった。いずれの指摘も実習生にとっては新鮮な視点が得られたようで、日本の誇る Lesson Study（授業研究）を体験してもらう貴重な機会であったと考える。

ホームルーム経営に関する指導では、インドネシアの学校の様子や自己紹介など、英語と日本語を交えて毎日スピーチしてもらった。実習生は言葉の壁や教壇に立つことへの心理的なハードルを強く感じながらも、一生懸命にコミュニケーションを取ろうと葛藤する様子が見られた。母国語や英語でコミュニケーションを取ることのできない生徒を相手にすることで、生徒に何を伝えたいのか、それを如何にして伝えるかをより模索することができたのではないだろうか。また、生徒の視点から考えると、このような実習生の姿に影響を受けて、英語に対して苦手意識のある生徒も実習生が何を伝えようとしているのか理解しようと耳を傾ける姿や、生徒同士で理解できたことを共有する姿が見られた。目の前にいる生身の実習生が英語で話しているという真正な学習の文脈が生まれていたと解釈することもできるであろう。

IV. まとめと今後の展望

以上をまとめると、本プログラムによる成果は下記3点にあると考える。

- ① 異なる学校文化とその社会的背景が実体験を基に理解でき、教員は自国の学校文化を総体的な視点から捉えることができる。
- ② 国際教育実習を実施するに当たって、派遣元の国の教育環境や学校文化、教育制度などを理解できたことで、受け入れ先の国における指導教官にとっては実習生の言動を理解する助けとなる。
- ③ 持続可能な開発のための教育を展開・継続するためにも、教員が多様な経験と人脈を有することに繋がる。

「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」
インドネシア教職員交流プログラムに参加して

筑波大学附属坂戸高等学校
工業・情報・理科教諭 高橋 裕

1. はじめに

2022年12月21日から27日の日程でインドネシア教職員交流プログラムに参加した。ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校、インドネシア教育大学および附属高等学校、アルアザール19チラチャスイスラミック高等学校の3校を訪問し、主に各校の教員との交流および学習環境の視察を行なった。また、本校では2023年2月から約1ヶ月間、SEA-Teachers（東南アジア諸国からの教育実習生）の受け入れを行なっている。本プログラムを通して得られた経験とSEA-Teachers受け入れを通して得た気づきをもとに、教員同士の国際交流の意義について報告する。

2. 実体験を通じた肌感覚の獲得

コロナ禍において、本校（筑波大学坂戸高等学校）のSG（スーパーグローバル）クラスでは必修科目「グローバルパスポート」（以下、GP）の授業の一環で姉妹校とのオンライン交流を行っている。オンライン交流は手軽に海外と繋がる利点がある。本プログラム中も本校の教室とオンラインで繋ぎ、インドネシアの様子を紹介する機会をつくることができた（写真1）。このような便利な側面がある一方、モニター越しでの当事者意識や熱量の共有には限界を感じる。GP担当者としても、実際に訪れたことのない海外の学校、会ったことのない相手との交流は、文化や状況の把握が難しく、オンラインでのやり取りにもどかしさを感じることもある。そのような状況の中、本プログラムに参加することとなった。

本プログラムでは、GPでオンライン交流を行なっているコルニタ高等学校にも訪問した。オンラインで交流した教員や生徒と実際に会って会話をすることができ、生徒たちには校舎の案内をしてもらった（写真2）。日本では見かけない教材や、動植物、お祈りの部屋など、生徒たちがどのような環境で学習に取り組んでいるか、インドネシアの文化や風習に対する理解を深めることができた。本プログラムを通して、教員や生徒とのささやかな会話のやり取り、校舎の匂いや手触り感など、オンラインではどうしても削ぎ落とされてしまう部分の重要性を再認識することができた。

実際に現地に訪れたことで得られたこの貴重な経験を本校での学習活動に活かすとともに、今後の姉妹校交流をより豊かなものにし、本校および交流校の生徒の学びの質向上に還元していきたい。

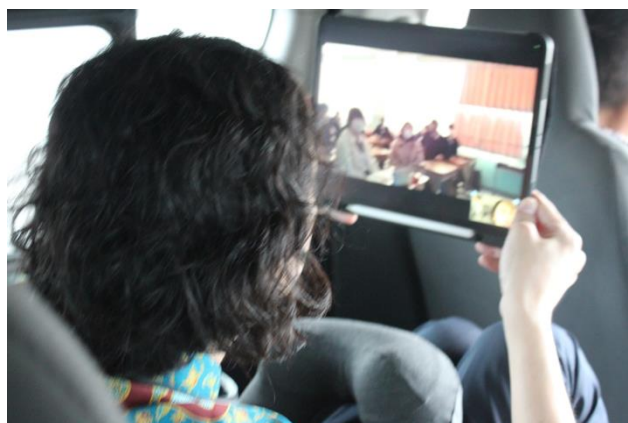


写真1 HRと繋げてのインドネシア紹介



写真2 生徒による校舎案内

3. SEA-Teachers 受け入れによる効果

続いて本校に SEA-Teachers 受け入れることで本校生徒にどのような変化がみられたか報告する。

私が担任を務める学級では、タイ人とインドネシア人の2名の SEA-Teacher を受け入れている。毎日の SHR を活用し、彼らに自国文化の紹介、自国と日本との違い、週末の過ごし方などを紹介してもらっている（写真 3）。紹介あとは、生徒たちは班で SEA-Teachers が話した内容についての理解度を確認しあい、英語での質問を考える。生徒たちは、最初は英語での交流に恥ずかしがり、若干消極的な様子だった。しかし、1週間、2週間と共に過ごすに伴い、徐々に SEA-Teacher とのラポールが形成されるとともに、英語でのコミュニケーションにも慣れていき、最終的には SEA-Teacher に積極的に質問するようになった。帰国前のフェアウェルパーティ兼 SHR では、一緒に歌を歌ったり、SEA-Teacher からのダンスパフォーマンスなどもあり、SHR 終了後も複数名の生徒が教室に残って SEA-Teacher との最後の会話を楽しんでいた。

このような体験もオンラインだけでは難しく、対面ならではの利点だと言える。SEA-Teachers 受け入れによって、生徒の異文化への理解と対応力がより深まったと感じている。

4. おわりに

コロナ禍以降、テクノロジーの進歩が目まぐるしく、オンラインでの交流が当たり前になった現在だからこそ、画面越しでは得られない実際の体験が重要である。教員の派遣や SEA-Teachers 受け入れはそのようなオンライン教育に不足しがちな実際の体験を補完するのに重要な役割を担うと実感している。しかしながら、この制度を持続可能なものにしていくためには、今後ますますの国家間、学校間の連携とプログラムの充実が求められることだろう。より有益なプログラムになるよう微力ながらその取り組みに貢献できる人材を目指して努めていきたい。

この度は非常に学びの大きいプログラムに参加させていただき、機会を与えてくださった方々、訪問先の皆様の心から御礼申し上げます。



写真 3 自国の文化紹介

「ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究」
インドネシア教職員交流プログラムに参加して

筑波大学東京キャンパス事務部学校支援課 高畑麻莉恵

2022年12月22日～12月26日に、ボゴール農科大学付属コルニタ高校、インドネシア教育大学付属高等学校、パクアン大学教育学部、アル・アズハール第19シラカスイスラーム高校等を訪問した。訪問先においては、施設見学、教職員との情報交換等を行った。

インドネシアの高校生には日本文化、特に漫画やアニメ等のサブカルチャーが人気であり、日本留学に関心が高いことがわかった。日本への留学や就業経験を経た教員が身近にすることで、生徒にとっても日本文化への知識や関心等が更に高まる影響が見受けられ、良いロールモデルになっていると感じられた。教育人材の育成は言うまでもなく子どもたちの教育の質の向上に直結しており、本事業を経験した教員が現地国の生徒に日本で培った経験や知見を伝えていくことは、日本の国際的プレゼンス向上のみならず、SDGsにも大いに貢献するものである。

本邦においても、日本人学生の「内向き志向」が指摘されているところ、学校にグローバルな経験を有する日本人教員や、他国の教員から直接教育を受けられる機会は非常に刺激になると考えられる。今回の滞在中、訪問教員の2名が現地からオンラインで日本にいるクラス生徒に対してHRを行っていたのだが、生徒の反応も活発であり、日本国外への訪問が距離の近いものとして受け止められる、非常に良い取組であると感じた。

今回の訪問を通じ、高校段階の教育機関における国際交流は、教育現場の前線で働く教員のコミュニケーション・ネットワーキングや、懸命な教育活動等の種々のたゆまぬ尽力により支えられていることを再認識した。いかなる規模の事業であろうとも、最終的には人と人との繋がりが最も重要かつ基本的な第一歩であり、国や大学等の関係機関は教員の過重負担とならないよう、予算面や制度面で支援していく責務を認識しなければならない。

各種助成や事業等における申請の簡便化や可能な限り早期の予算配分も学校や教員の負担軽減に必要であり、限りある財源を真に有効に活用するためにも、スピード感を持った対応は重要であると思料した。

また、現地教員との質疑応答等においては、高校段階での国際交流に留まらず、引き続き日本の大学へインドネシアの生徒を進学させることの関心の高さが顕著に伺われた。高校間交流を端緒として、日本国内の高等教育機関の入学に繋げる枠組や入試制度等は関心の高い学校関係者が多いと思われ、国外の優秀な学生のリクルーティングに直結することが推測される。現在も国費留学生制度等があるが、例えばSEAMEO内の枠組みや事業として創設すること等も有効ではないか。

相互の実りある国際教育活動のため、今後とも有効な教職員交流について検討を重ね、推進に努力してまいりたい。

以上



コルニタ高校教職員と

日本の探究学習について説明を行う本校教員

4.1.3 フィリピンへの教員の派遣

○セントラルルソン州立大の HP の記事



The University of Tsukuba Senior High School at Sakado (UTSS), Japan, visited the Central Luzon State University (CLSU) Laboratory High Schools on March 8, 2023.

Dr. Edgar A. Orden, University President, together with Dr. Renato G. Reyes, Vice President for Academic Affairs (VPAA) and Director of the International Affairs Office (IAO), Dr. Regidor G. Gaboy, College of Education (CEd) Dean, and some faculty members from the CLSU Laboratory High Schools (USHS and ASTS) welcomed Mr. Yoshikazu Tatemoto, Director for Committee of International Education and Program Development and Mr. Kenichi Yoshida, Coordinator of the International Baccalaureate Diploma Program, two Professors from UTSS, to discuss opportunities for international collaboration and/or partnership between UTSS and CLSU Laboratory High Schools.

As part of the meeting, Dr. Remedios Z. Panuyas, USHS Head, presented the CLSU Laboratory High Schools unique curricular offerings that have emphasis on Science, Technology, Engineering, Agriculture, and Mathematics (STEAM).


The CLSU Laboratory High Schools (USHS and ASTS) also highlighted their Education for Sustainable Development (ESD)-related activities, some internationalization involvement of faculty and students, and research breakthroughs. They also presented some student and teacher exchanges program and research publications.



The CEd looks forward to the signing of the Memorandum of Understanding (MOU) with the UTSS until this coming April.

○セントラルルゾン州立大附属高等学校の SNS の記事



UPDATE|| CLSU Science High School Head Dr. Panuyas presents USHS S&T-based curriculum, Education for Sustainable Development (ESD)-related activities, and faculty and students research breakthroughs, during the school visit and tour and bilateral meeting with the [University of Tsukuba Senior High School at Sakado](#), March 8. 🇵🇭 🇯🇵
[#internationalization](#)
[#SDG4QualityEducation](#)
[#sdg16peacejusticeandstronginstitutions](#)
[#SDG17partnershipsforthegoals](#)

 **Related SDGs**

 4 Goal 4: Quality Education	 17 Goal 17: Partnership for the Goals
--	--

4.2 海外3か国の教員の日本招聘事業の内容と成果

教職員交流事業は、日本からの派遣が主たる事業であるが、本事業のテーマである「国際協働教育実習」は、国を越えて大学生の相互派遣を行っている。本事業においても、相互派遣により国を越えて大学附属学校における教育実習活動の相互理解を図るため、相互派遣の形をとった。

日本への招聘に当たっては、SEA-teacher パイロットプロジェクトで、インドネシア、タイ、フィリピンの教育実習生が実際に附属坂戸高等学校で実習を行っている時期と同時期に招聘を行い事業の効果を高めることとした。また、招聘期間中に附属坂戸高等学校が全国の総合学科を主な対象に実施している、総合学科研究大会も開催され、本事業成果の外部への発信にもつとめた。

各国からの参加者からのコメントの概略、評価委員である千葉大学教育学部辻教授からのコメントを示す。なお、各国からの招聘期間および招聘者とその機関は以下のとおりである。

招聘期間：令和5年2月7日（火）～令和5年2月12日（日）

表2 各国からの参加者一覧

No.	参加者名	国籍	役職	学校名
1	TRI HERU WIDARTO	インドネシア	校長	ボゴール農科大附属 コルニタ高等学校
2	INNA AWALYA SULISTIARA	インドネシア	教員	ボゴール農科大附属 コルニタ高等学校
3	LIA LAELA SARAH	インドネシア	教員	インドネシア教育大 附属高等学校
4	INDRI EKA PERTIWI	インドネシア	教員	インドネシア教育大 附属高等学校
5	PAKAMAS NANTAJEEWARAWAT	タイ	校長	カセサート大附属 高等学校
6	SOMSAK TECHAKOSIT	タイ	教員	カセサート大附属 高等学校
7	ISSARA KANJUG	タイ	教員	コンケン大附属 高等学校
8	SARAWUT JACKPENG	タイ	教員	コンケン大附属 高等学校
9	MABEL SOTELO BUELA	フィリピン	校長	フィリピン大附属 ルーラル高等学校
10	RUBY LYNN GENELSA VENTURA	フィリピン	教員	フィリピン大附属 ルーラル高等学校
11	JOHN PAUL ESPENILLA SANTOS	フィリピン	教員	セントラルルゾン大 附属高等学校
12	JOSEPH AGBUYA VILLARAMA	フィリピン	教員	セントラルルゾン大 附属高等学校

表3 おもな交流プログラムの内容

2月8日	水	<ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学における協議会 ・筑波大学に留学している各国からの留学生との交流会
2月9日	木	<ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学附属駒場高等学校における授業見学と協議会 ・筑波大学附属学校教育局における協議会
2月10日	金	<ul style="list-style-type: none"> ・SEA-teacher実習生の授業見学 ・大豆を教材にしたESDワークショップ @筑波大学附属坂戸高等学校
2月11日	土	<ul style="list-style-type: none"> ・第26回総合学科研究大会 ・SEA-teacher研究協議会 @筑波大学附属坂戸高等学校



筑波大学における協議会



SEA-teacher 実習生の授業見学



Dr. Regidor による SEA-teacher の説明



石森評価委員による講評

○招聘者からのフィードバックの概要

UTSS School Partnership Program Feedback

What do you think of our school partnership program?

“It is very wonderful to see the growth of the international exchange programs initiated by UTSS with its partner schools. With more partners this year, we are excited to see where it leads us in the future. In particular, we are excited to partake in the SEA Teachers program. We also like to empower our teachers through this program to cultivate a global mindset. Again, thank you very much for the warm welcome and hospitality. We appreciate with gratitude your commitment in maintaining good relationships with the sister schools. Arigatou gozaimasu!”

UTSS がパートナー校と始めた国際交流プログラムが成長しているのを見るのは、とても素晴らしいことです。今年はさらに提携校が増え、今後の展開が楽しみです。特に、SEA Teachers プログラムに参加できることをうれしく思っています。また、このプログラムを通じて、グローバルマインドを養うために、先生方に力を与えたいと考えています。

改めて、温かい歓迎とおもてなしに感謝いたします。私たちは、姉妹校との良好な関係を維持するために尽力してくださっていることに感謝しています。アリガトウゴザイマス！

Mabel S. Buela

University of the Philippines Rural High School
Philippines

“The program is a great opportunity for the students. Through the program, students can recognize diversity through different cultural immersion activities. Likewise, some schools of students who cannot come at par in terms of technology also get the chance to observe or experience them in a developed country such as Japan. Although the program is a good experience most students aspire to have, it also has a few drawbacks, especially in terms of expenses. In the case of UPRHS students, only those who are financially able can participate because of the expenses that they will incur. Nevertheless, we are very grateful that our school has been chosen as one of the sister schools. Thank you very much!”

このプログラムは、学生にとって素晴らしい機会です。このプログラムを通じて、生徒たちはさまざまな文化体験活動を通じて多様性を認識することができます。同様に、技術的に及ばない生徒の学校も、日本のような先進国で観察したり体験したりする機会を得ることができます。このプログラムは、多くの学生が憧れる良い経験ではありますが、特に費用の面でいくつかの欠点もあります。UPRHS の学生の場合、経費がかかるため、経済的に余裕のある人しか参加できません。それでも、私たちの学校が姉妹校の1つに選ばれたことは、とてもありがたいことです。ありがとうございました。

Ruby Lynn Ventura

University of the Philippines Rural High School
Philippines

“The partnership program with partner schools is really inspiring and makes us want to experience and forge something the same so we could also be on the “race” of the global trend. The partnership does not only strengthen the bonds between institutions but also, they develop certain learnings/strategies they can use in the future.”

パートナー校とのパートナーシッププログラムは本当に刺激的で、私たちも今回の交流を機に、同じようにパートナーシップを提携し、グローバルパートナーシップという世界のトレンドに参加したいと思うようになりました。パートナーシップは、学校間の絆を深めるだけでなく、将来的に利用できる確かな学習や戦略を開発することができます。

John Paul Santos
Central Luzon State University High School
Philippines

“The partnership provides opportunities for collective action towards global development in the field of education. We are very much interested in becoming a partner of UTSS. Thank you very much.”

このパートナーシップは、教育分野におけるグローバルな発展に向けた協働活動の機会を提供するものです。私たちはUTSSのパートナーになることを強く希望しています。ありがとうございました。

Regidor G. Gabo
Central Luzon State University High School
Philippines

“This partnership program is an excellent program that can be a model for other schools. We learn from each other. The activities of the program improve and inspire us. And also motivate us to do continuous improvements that benefit students and the education in general.

In the future, some teachers expect that they can have joint classes with other schools of different countries, especially in the subject of English, Japanese or Indonesian language. I am quite sure that these joint classes will give great impacts not only to students but also to the school.”

このパートナーシッププログラムは、他の学校のモデルとなり得る優れたプログラムです。私たちは互いに学び合っています。このプログラムの活動は、私たちを改善し、勇気づけてくれます。そしてまた、生徒や教育全体に利益をもたらすような継続的な改善を行うよう、私たちを動機づけるのです。

将来的には、特に英語、日本語、インドネシア語などの科目で、さまざまな国の学校と合同で授業を行うことを期待する先生もいます。このような合同授業は、生徒だけでなく、学校にも大きな影響を与えるものと確信しています。

Tri Heru Widarto
Kornita Senior High School
Indonesia

"We do really appreciate this program and opportunity to be invited in this honored country. Our school is glad to be part of the SEA Teacher program receiving pre-service student teacher in our school. Therefore, we also look forward to working and collaborating more and longer in this program. Hence, we also expect that our school could be a sister school of Sakado Senior High School, UTSS in the near future."

私たちは、このプログラムと、この名誉ある国に招待される機会に本当に感謝しています。私たちの学校では、現職の学生教師を受け入れている SEA Teacher プログラムの一員であることを嬉しく思います。そして、今後、私たちは今後、この連携プログラムや SEA-teacher プログラムを通じて、長期的に、連携・協働していくことを楽しみにしています。そして近い将来、本校が UTSS と姉妹校になることを期待しています

Lia Laela Sarah and Indri Eka Pertiwi
Universitas Pendidikan Indonesia Senior High School
Indonesia

"It's a good program that provides opportunities for teachers from ASEAN countries and Japan to exchange knowledge with each other. Developing relationships and collaboration on student exchange. We hope that this relationship will expand further to ensure sustainability."

ASEAN 諸国と日本の教師が互いに知識を交換する機会を提供する良いプログラムだと思います。学生交流に関する関係や協力関係を発展させる。持続可能性を確保するために、この関係がさらに拡大することを望む

Mrs. Pakamas Nantajeewarawat and Asst. Dr. Somsak Techakosit
Kasetsart University Laboratory School
Thailand

"We are proud to have the opportunity to participate and be a part of the school partnership program with UTSS that shows ideas and shares discussion with other schools in many countries. In the future, KKU would like to be a part of the project to develop the student teacher training and research together."

多くの国の先生方とアイデアを示し、議論を共有できる学校提携プログラムに参加し、その一員となる機会を得たことを誇りに思います。将来的には、KKU は学生教師のトレーニングや研究を共に発展させるプロジェクトの一員になりたいと考えています。

Assoc. Prof. Dr. SARAWUT JACKPENG
Khon Kaen University Demonstration School
Thailand

○評価委員千葉大学辻先生から ESD ワークショップに関するコメント

SEA-teacher プロジェクトについて

千葉大学教育学部 辻 耕治

「大豆を教材にした ESD ワークショップ」の提案およびそのファシリテーターをさせていただいた。本ワークショップを提案させていただいた理由は、日本およびアセアンで共有可能な教材として大豆は有効であると着想したためである。大豆は、食料源としての重要性、伝統的な食文化との関わり、食品・料理の多様性、栽培に使用する農薬や肥料と環境との関わり、農家への教育の重要性とその方法、栽培に関する技術の種類とその可能性、輸出入や雇用と関連したグローバルな経済の中での位置づけ、など SDGs と関係する多様な観点を包含している。特に日本およびアセアンでは生活に身近な食材であり、生徒の関心も高いと思われる。本ワークショップは、日本およびアセアンで共有可能な大豆を教材とした授業例を各グループで議論し、そのアイデアをポスターにまとめ、全体の発表会で共有する、という構成・流れとした。その際、各グループは複数の国のメンバーで構成するようにし、国間での多様性・共通点に気づいていただく機会とすることにも留意した。ワークショップでは、いずれのグループも活発に議論・情報共有を行っていたように見受けた。発表会も盛況であったように感じた。参加者への事後アンケートの結果からは、本ワークショップは総じて有意義だったと受け止められていることが読み取れた。また、参加者が本ワークショップで学んだことは、SDGs に関する教材としての大豆の有効性を知ったこと、他国の方々と議論・情報共有できたこと、といった主に二つの観点からの回答に分類できた。特に後者の観点からの学びは、複数の国からの参加者が対面で交流できた本プログラムの成果の一つと考えている。



大豆をテーマに議論を行う各国教員



3 か国の協働作業で完成させたポスター

第5章 成果の普及および今後の事業展開に関する課題と提言

最後に、本事業で得られた成果の発信・普及と、今後の事業展望にむけた課題と提言を行う。

5.1 成果の発信・普及について

まずは、派遣教員が所属校において派遣事業での成果を共有することで、各校における教員養成の考え方がアップデートされることが期待される。実際に、2022年12月にタイ、インドネシアに派遣された教員は、2023年2月にSEA-teacherの学生を受け入れた際に、積極的に事業に参画し、他の教員との橋渡し役を務めていた。

本学の附属学校教員は教育実習の指導の他、大学の教職科目の担当として、直接教員志望の学生の指導を行っている。附属学校教員の教員養成に対する意識の変化は、直接本学の教員養成の質的な向上につながるものである。本学附属学校には教師教育拠点としての機能を有することが求められている。本学での有用な実践は、他大学の教員養成のあり方にも影響を与えることも考えられる。

そして、附属学校が実施する研究大会や、SGHネットワークやWWLネットワークを活用した成果の全国発信、さらには大学との連携のもと、海外に向けた発信も可能となる。ここでは、事業期間内に実施できた成果発信について国内、および海外への発信においてまとめる。

5.1.1 国内における成果の発信・普及について

1) 第26回総合学科研究大会における全国発信：令和5年2月11日(土)

筑坂が主催して実施している総合学科研究大会において、冒頭で参加者全員に対して、SEA-teacherについて紹介を行い、午後に実施したSEA-teacher協議会も公開して実施した。大会の事後アンケートには、SEA-teacher事業に関心を示された参加者が複数あり、今後の広がりが期待されるものであった。

2) 埼玉県越生町における「梅凜フェス」に参加：令和5年2月25日(土)

本事業でタイに派遣された農業科教員が中心となり、英語科教員との協働のもと、農業の授業および総合的な探究の時間の授業で国際教育実習生を受け入れ、英語による授業が展開された。その成果を地域のイベントでの成果発表につなげ、越生町の梅林で、日本の高校生とアセアン各国からの教育実習生が協力し、両国に共通する植物資源である竹を活用したランタンを灯した。地域学習とグローバル教育の融合した活動で、SDGsにつながる活動となった。当日は、2,000人の参加者があった。

5.1.2 海外における成果の普及について

SEA-T のインパクト、及び成果について発表するために、the 11th SEAMEO-University of Tsukuba (UT) Symposium on 20-21-22 February 2023.にて、口頭発表の機会を得た。本シンポジウムのテーマは、“Technology and Values-Driven Transformation in Education.”であり、主に東南アジア諸国で初等中等教育、及び高等教育に携わる関係者が出席した。

本シンポジウムは、東南アジア各国で視聴されており、そのインパクトは大きい。本事業の成果を発表する貴重な機会となった。なお、参加人数は以下の通りである。

- Pre-registrants = 15,533 participants (accumulated as of 21 Feb)
- Peak number of participants in con-current Youtube live = 1,318 persons
- Peak played-back participants during live = 5,345 views
- Likes in YouTube = 586 Likes (as of 23 Feb)

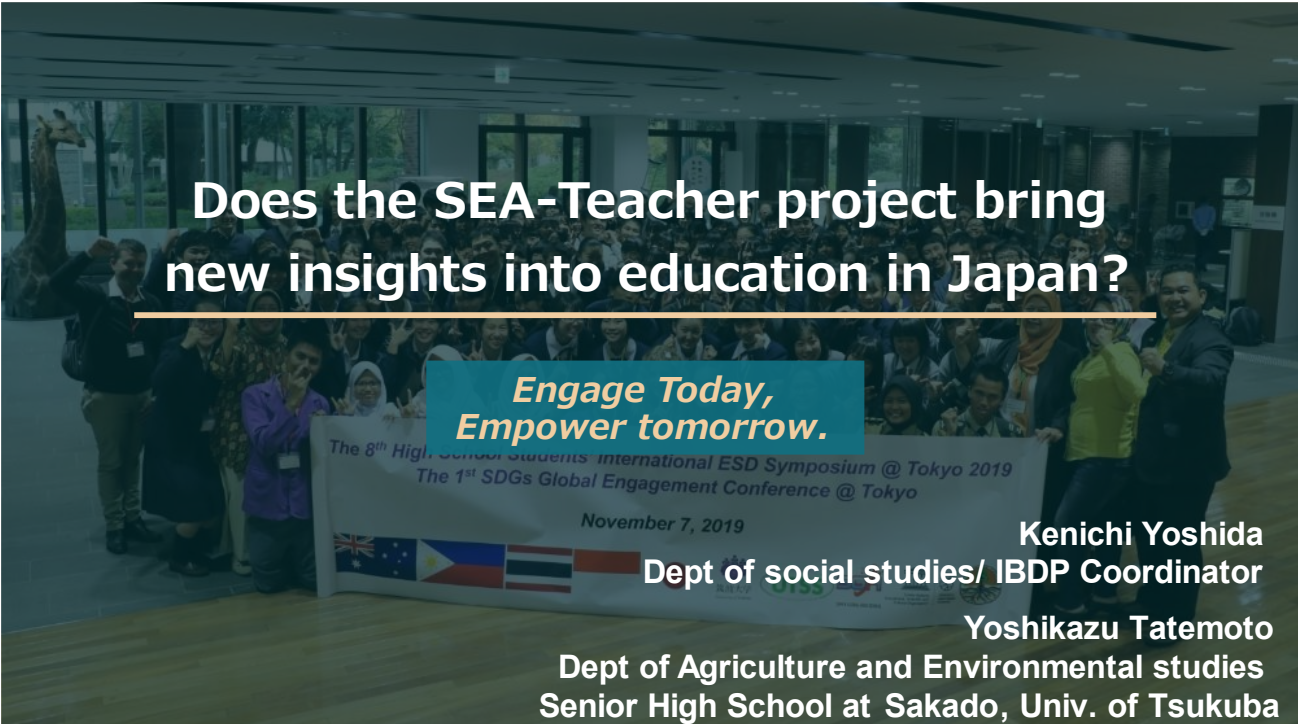
1. 発表概要

- ・ 国際会議名称：11th SEAMEO-University of Tsukuba (UT) Symposium
- ・ 日時：2023年2月20日～22日。オンライン開催。
- ・ 登壇セッション：2023年2月22日
「Session 5: Technology and Values-Driven Transformation in Teacher and Higher Education」
- ・ 発表者：吉田賢一（公民科教諭 IBDP Coordinator）、
建元喜寿（農業科教諭、国際教育推進委員会 委員長）
- ・ 発表タイトル：Does SEA-Teacher Project Bring New Insights into Education in Japan?
– Lessons Learned from ASEAN’s Experience for Japan
- ・ 発表要旨

The SEA Teacher Project or the “Pre-Service Student Teacher Exchange in Southeast Asia” is a project that aims to provide opportunity for pre-service student teachers from universities in Southeast Asia to have teaching experiences (practicum) in schools in other countries in Southeast Asia. As an affiliated member of SEAMEO, the University of Tsukuba has been providing the student teachers from ASEAN with opportunity to have teaching practices at Senior High School at Sakado, University of Tsukuba.

The author explains about the actual SEA-Teacher experiences at Senior High School at Sakado, which is one of the laboratory schools of the University of Tsukuba. The implications and lessons learned from SEA-Teacher project are (1) the importance of teaching experiences in overseas schools before working as a professional teacher, (2) positive impacts on the high school students studying at the receiving schools, and (3) the contribution to teachers’ capacity building at the receiving schools.

2. 発表資料

A group of people, including students and staff, are gathered for a conference. They are holding a large white banner that reads: "The 8th High School Students' International ESD Symposium @ Tokyo 2019", "The 1st SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo", and "November 7, 2019". The banner also features flags of Australia, the Philippines, and Thailand. A teal text box in the center of the image contains the slogan "Engage Today, Empower tomorrow." in white text. The background shows a modern building interior with large windows and a giraffe sculpture on the left.

Does the SEA-Teacher project bring new insights into education in Japan?

*Engage Today,
Empower tomorrow.*

The 8th High School Students' International ESD Symposium @ Tokyo 2019
The 1st SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo
November 7, 2019

Kenichi Yoshida
Dept of social studies/ IBDP Coordinator

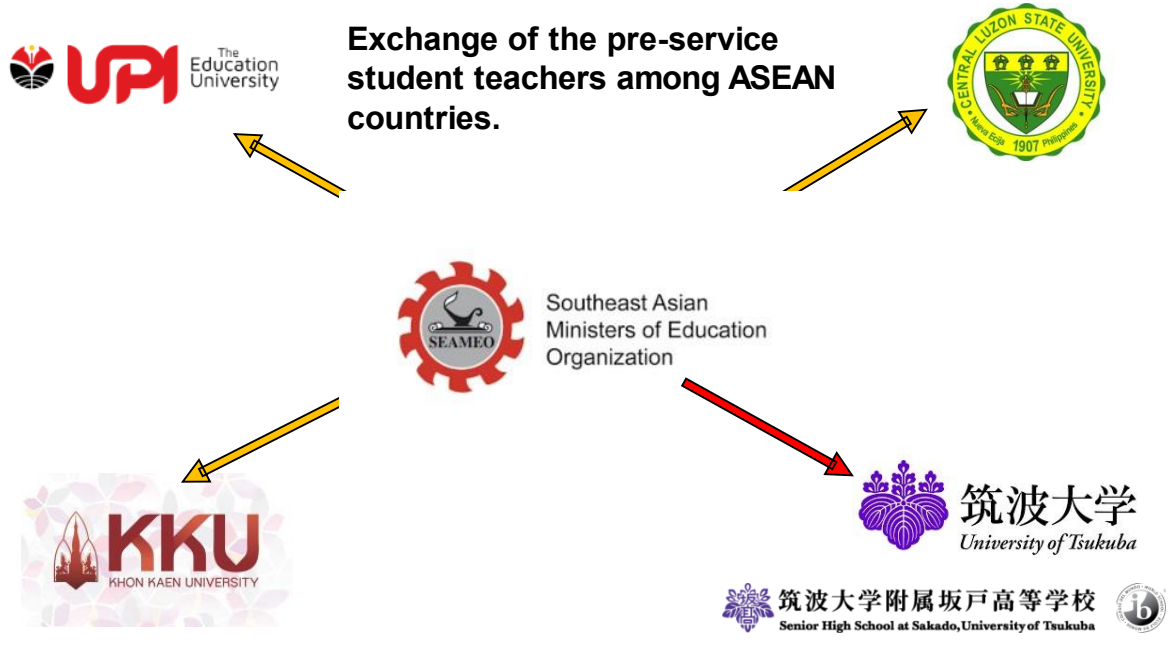
Yoshikazu Tatemoto
Dept of Agriculture and Environmental studies
Senior High School at Sakado, Univ. of Tsukuba

Question for today.

What should Japan learn from ASEAN's experience?

SEA-T project

Transnational teacher-training internship for the pre-service student teachers.



Receiving institution

Senior High School at Sakado, Univ. of Tsukuba (UTSS)

One of the laboratory schools of the Univ. of Tsukuba

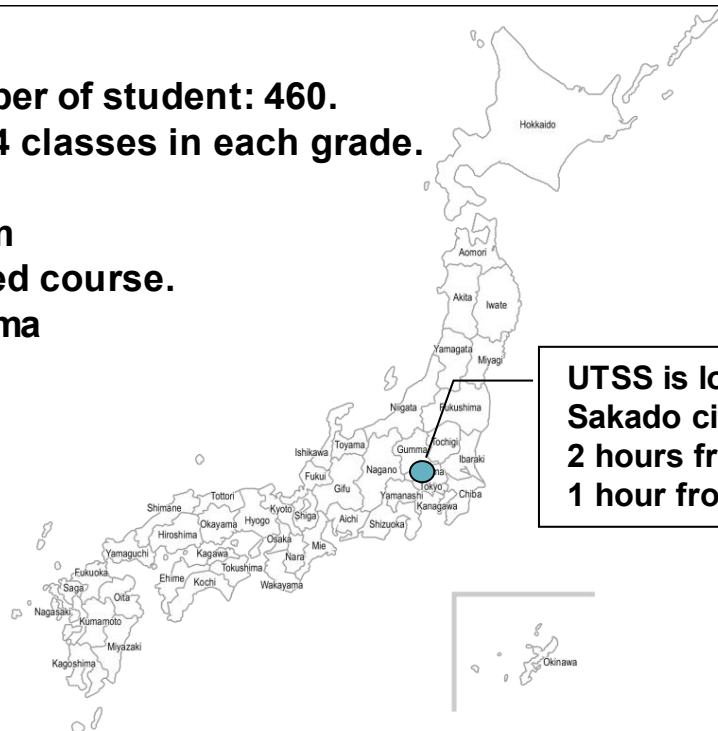


5

Total Number of student: 460.
There are 4 classes in each grade.

Curriculum

1. Integrated course.
2. IB Diploma



5





Survey (December, 2022) @Khon Kaen University Demonstration School, Thailand

ii



[Impacts on SEA -Teachers]

- (1) Cross-Cultural understanding and adaptive skills**
- (2) International minded, open-minded, and **ESD** perspectives**
- (3) Different types of lesson plans and classroom management**

[Impacts on High School students]

- (1) Cross-Cultural understanding**
- (2) International minded and open-minded**
- (3) English. e.g) CLIL (Content and language integrated learning)**

13

SET-Teachers 2023 @Sakado

Sending Universities	Subjects
Central Luzon State University	Three students Arts and Culture Sports education
Khon Kaen University	Three students English
Universitas Pendidikan Indonesia / UPI	Three students Chemistry Mathematics Social Studies

14

Actual teaching practice last week

A student teacher from Indonesia

Subject: Ethics (Social studies for the Grade 11 students)

15

Islam

The number of Muslim population has rapidly increased. Why?



16

Muslim student-teacher from Indonesia teaches Islam by using English as a foreign language for the Non-Muslim Japanese Students.

17

Bamboo: Arts and culture Bamboo was replaced by plastic. Why?

A student teacher from the Philippines

Subject: Agriculture and Environment (Elective subject for the Grade 11 students)



18



Lessons and suggestions for Japan



- Significance of teaching experiences in overseas before teaching as a professional teacher
- Impacts on the high school students.

3. 最後に

SEA-T が ESD の発展に寄与する可能性、及び生徒・教職員に与えるポジティブな影響はとても大きい。今回、大規模な国際会議で本事業の取り組みについて発表したことは、今後の SEA-T 及び ESD の発展に貢献するものである。

国を超えて ESD の取り組みを推進していくことの重要性は、高まるばかりである。パンデミックの影響により、アクチュアルな国際教育事業が中断してしまっただが、2022 年度から少しずつ国を超えた国際交流が再開しつつある。本事業でタイ、インドネシアに渡航し、SEA-T 及び ESD の実践について、各学校と研究討議を行い、その成果を本シンポジウムで発表することができたことは、ひとつの成果である。

加えて、各学校から ESD に携わる教員を招へいし、本校研究大会にてセッションを持つことができたことも、ESD の推進についてきわめて意義があることであった。実際、フィリピンの Central Luzon State University Science School から ESD に関する連携について打診があり、連携について協議を開始した。2023 年 3 月にフィリピンを訪問し、今後の連携について具体的な協議を進めることが決定した。このことも本事業の重要な成果である。来年度も、本事業の成果を生かして、さらに ESD を推進していく所存である。

(公民科 吉田賢一)

5.2 今後の事業展望と課題・提言

今後の事業展望をまとめる前に、あらためて本事業を着想した際の問題意識をまとめる。

課題1：日本における教員養成課程は、教科指導に関する内容が主であり、ESD やグローバル教育に関する講義や実習は極めて稀である。

国際的な協働が重視される SDGs の時代においては、すべての教員がグローバルな視点を持つことが求められる。教職を志望する大学生が、海外の学校で教育実習を行い、授業実践や、現地の学校や教職員と学生時代に国際的なネットワークを構築できるような経験を積むことができれば、国際的な文脈をもつ ESD の推進と SDGs の達成に大きな意味をもつ。現職教員の研修については、海外に渡航し研修を積む機会も重要であるが、財政上も業務上の制約もある。そこで、日本の学校で、海外からの教育実習生をうけ入れることができれば、現職教員やさらには生徒にとっても、国際理解を深める貴重な機会となりうる。

課題2：すでにアセアン諸国では、国を越えた教育実習を実施しており、グローバルマインドをもった教員養成の分野では日本は後れを取っている。

教育面において、日本も優れた面を多数持ち合わせているが、グローバルマインドをもった教員の養成、そして現職教員の研修という面では、諸外国と比較し、遅れをとっているのが事実である。また、探究学習についても、日本の高等学校の生徒数の7割をしめる普通科では、ようやく「総合的な探究の時間」が2022年度から導入されたが、今回の交流先となった3か国のすべてにおいて、すでに探究学習や卒業研究、課題研究の時間は以前から実施されている。

ESD の推進と SDGs の達成は、地球市民としての意識を高いレベルで持ち続ける人材が増えてこそ初めて実現できるものである。教育に携わる教員は、教員自身が地球市民としての意思を持ち、子どもたちに接することが求められる。

教員の基本的な素養としてグローバル人材であることが求められる時代となった。教育インターンとしての海外教育実習は教員養成課程において、教員自身の地球市民性を高める大変よい機会である。すでに、2016年から東南アジア各国で実施されており、筑坂でも受入の実績がある。日本においては、国際協働教育実習は教職単位として認定されないが、その教育効果を示すことができれば新たな教員養成のプログラムとして認知される可能性が高いと考えられる。国際協働教育実習を受け入れることは、受け入れ先の現職教員、そして何より生徒のグローバルマインドの育成にもつながるものでもある。

上記の課題を解決するために、本事業では、①日本で、SEA-teacher を実施していくには、どのような点が課題となるかを明らかにする、②英語科以外の現職教員が、国際協働教育実習の指導を行ううえで、英語に対する心理的障壁を低減させ、教科を問わず指導を実施できるようにするには、どのような方法があるかの検討を行った。そのうえで、今後、日本で国際協働教育実習が広がり、ESD for 2030 を担う教員養成が進展していくための3つの提言を行う。

提言 1：大学の附属学校がハブとなり日本の SEA-teacher 参画の促進を図る

SEA-teacher における指導内容と、日本の教育実習の比較を行ったところ、指導内容については大きな違いはなく、現状の日本国内の教育実習システムは、SEA-teacher を日本で実施していくうえで、十分なベースとなることがわかった。学習指導案の作成を行い、実際に授業を実施し、振り返りを行い、次の授業に活かしていく流れは、各国ともほぼ同様な流れであった。

国際教育実習は、教科を問わず、すべての授業は英語で実施されている。日本においても、英語以外の教科の授業もすべて英語で実施した。これまで、英語、数学、理科において国際教育実施の事例が多く報告されているが、2023年2月の第2回 SEA-teacher パイロットプロジェクトでは、本教員交流事業でタイに派遣された農業科教員が中心となり、英語科教員との協働のもと、農業の授業および総合的な探究の時間の授業で国際教育実習生を受け入れ、英語による授業が展開された。

これまでの SEA-teacher の分析を行った海外文献の報告では、SEA-teacher を実施していくうえで、指導側および実習生双方にとって、言葉が障壁となっていることが報告されている。しかし、事前学習、教員間の連携、各種の語学ツールの活用などで、その壁を乗り越える様子も報告されている。今回、英語に習熟していない農業科の教員が、SEA-teacher の指導を担当したことは、他校で実施する場合、大いに参考となりうるであろう。

提言 2：日本の通常の教育実習期間中に、SEA-teacher の学生の受け入れも行いより多くの日本の大学生がグローバルな経験を国内でもつめるようにする。

現在、SEA-teacher プログラムは、おもに1月と7月に実施されている。この時期は、日本の大学生の教育実習期間と重ならない場合もある。双方の実習の実施時期を共通の時期に設定できれば、日本人教育実習生が、海外からの教育実習生と、同時に実習に取り組むことができ、国際的な協働体験を日本国内においても経験できることとなる。

教育実習の事前指導は、ZOOM等を活用することで、実施可能であることが本事業であきらかとなった。今後、教員養成分野においても、ボーダレスな学びあいが促進していくことが予想される。事前指導はオンラインで、教育実習は各国の学校現場で行うことは十分可能であると考えられた

提言 3：Transnational Student-Teachers' eXchange Program (T-STEP) の創設と実装

アセアン諸国で実施されている SEA-teacher プログラムをモデルとし、柔軟な政策展開（制度設計、単位認定）や財政支援のもと、国際教育実習を国内に実装していくことは、日本社会のグローバル化にも対応できる教員の育成と現職教員の研修につながり、共生社会や持続可能な社会づくりにつながっていく可能性がある。

総合的な学習の時間の指導法と国際協働教育実習とを連動させ、教科に関わらず希望す

るすべての教育実習生が ESD やグローバル教育に関する経験をつめるような体制の整備が望まれる。アセアン各国との連携からはじめ、将来的には多くの国との連携が進むことが望まれる。

この提言を実現させていくには、エビデンスを基にした事業の評価も重要となろう。本年度は、国際協働教育実習の開発を中心においた国際比較をおこなったが、今後、1) 国際教育実習を受け入れた実習協力校の現職教員や生徒へのインパクト、2) 国際教育実習を経験した学生が、実際に教員になり、学生時代の国際経験を学校現場でどのように生かしているのか、また、3) SEA-teacher 参加で得た国際的なネットワークを維持継続しているのかといった調査を、中長期的に行っていきたいと考えている。

(文責：建元 喜寿)

資料1 本事業における比較研究に用いた文献

<海外文献>

- Anyolo, E.O., Kärkkäinen, S., & Keinonen, T.(2018). Implementing Education for Sustainable Development in Namibia: School Teachers' Perceptions and Teaching Practices, *Journal of Teacher Education for Sustainability*, 20(1), 61-81.
- Chrisie, U.M. & Ariyanti.(2020). SEA-Teacher Students' Perspective: Challenges Teaching English Overseas in the Philippines, *Borneo Educational Journal*, 2(1), 14-19.
- Ima, W. & Kewwalee, K.(2019). A reflective study on SEA Teacher Practice:from Thailand to Indonesia, *TAMANSISWAINTERNATIONAL JOURNAL IN EDUCATION AND SCIENCE*, 1(1),9-14.
- Lalu, R. T. S., Lalu, Z., Imam, B., Jannatin, 'A. , Dadi, S., & Wildan, W.(2020) University of Mataram in SEA Teacher Project:Lesson Learned From Students' Perspectives and Self-Reflection, *Advances in Social Science, Education and Humanities Research Proceedings of the 1st Annual Conference on Education and Social Sciences* ,24-26.
- Nurwidodo, N., Amin, M.,Ibrohim, I., & Sueb, S. (2020) . The Role of Eco-School Program (Adiwiyata) towards Environmental Literacy of High School Students, *European Journal of Educational Research*, 9(3), 1089-1103.
- Petra, B., Martin, S., & Gregor, T. (2020). Understanding of Sustainability and Education for Sustainable Development among Pre-Service Biology Teachers, *Sustainability*,12, 6892.
- Sherly R. & Fitri K.(2020). Voicing the Unvoiced Indonesian SEA Teacher Teaching in the Philippines: A Phenomenological Study, *International Journal of Innovation, Creativity and Change*,12(6),45-55.
- Stapleton, S. R. (2019) . A case for climate justice education: American youth connecting to intragenerational climate injustice in Bangladesh, *Environmental Education Research*, 25(5), 732-750.
- Venna, S. N. N., & Achmad, B. M.(2021) . Indonesian Pre-Service Teachers' Intercultural Awareness in SEA Teacher Project, *Advances in Social Science, Education and Humanities Research*, volume 595 (Proceedings of the Fifth International Conference on Language, Literature, Culture, and Education (ICOLLITE 2021)), 695-701.
- Wahyu, A.E., Yulius, T., & Sitti(2022). The Effect of SEA-Teacher Mentoring on The Students' Intrinsic Motivation in Teaching Practice, *Journal of Teaching of English* 7(4), 91-97.

<国内文献>

- 市瀬 智紀 (2020). ユネスコの推進する価値教育の学校現場における受容と変容の研究 「持続可能な開発のための教育 (ESD)」を事例として 東北大学大学院教育学研究科博士論文
- 磯田 正美・野村 名可男・建元 喜寿・竹中 絵美 (2020) : SEA-Teacher パイロットプログラム実施報告書 (2019 年度実施) 筑波大学教育開発国際協力研究センター
- 文部科学省 (2018) . 在外教育施設における教育実習を可能とする制度改正について

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1412089_1.pdf

(2023年3月10日)

永田 佳之 (2020a). 'ESD for 2030' を読み解く: 「持続可能な開発のための教育」の神髄とは, ESD 研究, 3, 5-17.

及川 幸彦 (2022). 持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議とベルリン宣言 ESD 研究, 5, 93-106.

岡田 真理紗 (2020). 外国人増加への期待と不安: 「外国人との共生社会に関する世論調査」から 放送研究と調査, 70 (8), 78-87.

岡村 郁子・黄 美麗・竹田 恒太(2019). 留学生急増国における日本へのプッシュ要因とプル要因についての検討 ベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカを中心に 留学交流, 105, 15-28.

白井 俊 (2020). OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー・資質・能力とカリキュラム, ミネルヴァ書房.

資料2 令和4年度「新時代の教育のための国際協働プログラム」合同成果報告会での発表資料



1. 調査・研究概要

■調査・研究名称

ESD for 2030を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究

■事業期間

令和4年11月21日～令和5年3月15日まで

■教員交流参加者の情報（所属機関の種別・人数など）

(派遣) 12名 (高等学校教員11名、大学職員1名)
(招聘) 12名 (高等学校教員12名)

■連携機関名

SEAMEO (東南アジア教育大臣機構)、駐日インドネシア大使館

1. 調査・研究概要

■教員交流対象国・機関名

<インドネシア>

インドネシア教育大学・インドネシア教育大学附属高等学校
ポゴール農科大学・ポゴール農科大学附属コルニタ高等学校

<タイ>

コンケン大学・コンケン大学附属高等学校
カセサート大学・カセサート大学附属高等学校

<フィリピン>

セントラルルゾン州立大学・セントラルルゾン州立大学附属高等学校
フィリピン大学・フィリピン大学附属ルーラル高等学校

2. 教員交流プログラムの概要

■事前調査

日本国内では、国を越えた教育実習は実施されていないため、COVID-19の発生前の2020年2月に、SEAMEOのパイロット事業として、筑波大学附属坂戸高等学校で実施したプログラム内容の整理と、SEA-teacherの現状（プログラムの実施時期、実施期間、受け入れ科目、指導体制等）について、海外の論文の調査や、インドネシア、タイ、フィリピンの連携機関や協力機関の協力のもと、実態把握を行った。

また、2020年2月に日本での、SEA-teacherパイロットプロジェクトに参加したインドネシアおよびフィリピンの学生から、プロジェクト参加の成果についてメール等により聞き取りを行った。

■交流国選定の理由

SEAMEOにおける国内唯一の提携機関（Affiliate member）である本学に、SEA-teacher事業への参加打診があった。2019年度に本学学生をインドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルソン大学に各2名計6名派遣し、3大学からも各2名計6名を附属坂戸高等学校（以下：筑波）を受け入れ高校として、SEA-teacherパイロットプログラムとして双方向な形で実施した実績がある。その際に、国を越えた教育実習が、「ESDやグローバル教育を担当できる教員の養成」に果たす大きな可能性を感じた。

また、筑波は、インドネシア、タイ、フィリピンに国際連携協定校を有しており、附属高校および大学が連携することで、本事業の目的を達成できると考えたため、この3か国を交流国に選定した。

2. 教員交流プログラムの概要

■事業テーマに関する現状の問題点

問題点：

①日本における教員養成課程は、教科指導に関する内容が主であり、グローバル教育に関する講義や実習は極めて稀である。

②すでにアセアン諸国では、国を越えた教育実習を実施しており、グローバルマインドをもった教員養成の分野では日本は後れを取っている。

国際的な協働が重視されるSDGsの時代においては、すべての教員がグローバルな視点を持つことを求められる。教職を志望する大学生が、海外の学校で教育実習を行い、授業実践や、現地の学校や教職員と学生時代に国際的なネットワークを構築できるような経験を積むことができれば、国際的な文脈をもつESDの推進とSDGsの達成に大きな意味をもつといえよう。

現職教員が、海外に渡航し研修を積む機会も重要であるが、財政上、業務上の制約もある。そこで、日本の学校で、海外からの教育実習生を受け入れることができれば、現職教員や生徒にも、国際理解を深める貴重な機会となりうるであろう。

■問題点を解決するための課題設定

課題設定：

①日本で、SEA-teacherを実施していくには、どのような点が課題となるかを明らかにする

②英語科以外の現職教員が、国際教育実習の指導を行ううえで、英語に対する心理的障壁を低減させ、教科を問わず指導を実施できるようにするには、どのような方法があるか検討をおこなう。

①SEA-teacherを受け入れている学校や、これまで交流実績のあるアセアン諸国の学校を訪問・交流を行い、これまでのSEA-teacherの受け入れ状況や、ESDやSDGsに関連した探究活動の状況の把握を行う。

②日本で実施されているSEA-teacherパイロット事業実施時期にあわせて海外から現職教員を招聘し、これまでの実施状況の共有、授業見学、受け入れに関する要点などを学ぶ機会を創出する。

2. 教員交流プログラムの概要

■交流スケジュール（派遣）

- 1) 令和4年12月11日～令和4年12月15日
教員5名：タイ

コンケン大学附属高等学校
カセサート大学附属高等学校

- 2) 令和4年12月21日～令和4年12月27日
教職員5名：インドネシア

インドネシア大学附属高等学校
ポゴール農科大学附属コルニタ高等学校

- 3) 令和5年3月6日～令和5年3月9日
教員2名：フィリピン

セントラルルソン州立大学附属高等学校
フィリピン大学附属ルーラル高等学校



日本とインドネシアをZOOMでつなぎ、ハイブリッド形式で協議会を開催する（令和4年12月23日@インドネシア教育大学）



日本のESDや探究学習について説明を行う、日本人教員（令和4年12月22日@ポゴール農科大学附属コルニタ高等学校）

2. 教員交流プログラムの概要

■交流スケジュール（招聘）

令和5年2月7日（火）～令和5年2月12日（日）

おもな交流プログラムの内容

2月8日	水	・筑波大学における協議会 ・筑波大学に留学している各国からの留学生との交流会
2月9日	木	・筑波大学附属駒場高等学校における授業見学と協議会 ・筑波大学附属学校教育局における協議会
2月10日	金	・SEA-teacher実習生の授業見学 ・大豆を教材にしたESDワークショップ @筑波大学附属坂戸高等学校
2月11日	土	・第26回総合学科学研究大会 ・SEA-teacher研究協議会 @筑波大学附属坂戸高等学校



4か国で共通して利用されている大豆を教材としたESDワークショップを千葉大学辻教授のご協力のもと実施。各国のノウハウの共有と、国を越えて実施できるESD教材の検討を行う。



SEA-teacher受け入れ経験を各国からの訪問団に報告するインドネシア教育大学附属高校の教員

2. 教員交流プログラムの概要

■交流成果の共有・発信

1) 第26回総合学科学研究大会における全国発信

令和5年2月11日（土）

全国から111名の参加者

2) 11th SEAMEO-University Of Tsukuba

Symposiumで成果報告

令和5年2月22日（水）

- Pre-registrants - 15,533 participants (accumulated as of 21 Feb)
- Peak number of participants in con-current Youtube live - 1,318 persons
- Peak played-back participants during live - 5,345 views
- Likes in YouTube - 586 Likes (as of 23 Feb)

3) 埼玉県越生町における「梅凛フェス」に参加

令和5年2月25日（土）

フェスにはおよそ2,000人が参加
(埼玉新聞2023年2月28日版より)



[Zoom] 11th SEAMEO-University of Tsukuba Symposium (DAY3: Wed22 Feb 2023 9-11:45am)

SEAMEOの国際会議における発表の様子は、以下のURLからアーカイブ配信が実施されている

<https://www.criced.tsukuba.ac.jp/math/seameo/2023/>



梅林に、日本の高校生とアセアン各国からの教育実習生が協力し、竹を活用したランタンを灯す。地域学習とグローバル教育の融合

3. 提言

■提言1：大学の附属学校がハブとなり日本のSEA-teacher参画の促進を図る

1) 現状の日本国内の教育実習システムは、SEA-teacherを日本で実施していくうえで、十分なベースとなることがわかった。学習指導案の作成を行い、実際に授業を実施し、振り返りを行い、次の授業に活かしていく流れは、各国ともほぼ同様な流れであった。

2) 国際教育実習は、教科を問わず、すべての授業は英語で実施されている。日本においても、英語以外の教科の授業もすべて英語で実施した。これまで、英語、数学、理科において国際教育実施の事例が多く報告されているが、2023年2月の第2回SEA-teacherパイロットプロジェクトでは、本教員交流事業でタイに派遣された農業科教員が中心となり、英語科教員との協働のもと、農業の授業および総合的な探究の時間の授業で国際教育実習生を受け入れ、英語による授業が展開された。今回の交流経験は他校で実施する場合の参考となりうる。

■提言2：日本の通常の教育実習期間中に、SEA-teacherの学生の受け入れもいり多くの日本の大学生がグローバルな経験を国内でもつめるようにする。

1) 現在、SEA-teacherプログラムは、おもに1月と7月に実施されている。この時期は、日本の大学生の教育実習期間と重ならない場合もある。双方の実習の実施時期を共通の時期に設定できれば、日本人教育実習生が、海外からの教育実習生と、同時に実習に取り組むことができ、国際的な協働体験を日本国内においても経験できることとなる。

2) 教育実習の事前指導も、ZOOM等を活用することで、実施可能であることが本事業であきらかとなった。今後、教員養成分野においても、ボーダレスな学びあいが促進していくことが予想される。事前指導はオンラインで、教育実習は各国の学校現場で行うことは十分可能であると考えられた。

3. 提言

■提言3：Transnational Student-Teachers' eXchange Program (T-STEP)の創設と実装


1) アセアン諸国で実施されているSEA-teacherプログラムをモデルとし、柔軟な政策展開（制度設計、単位認定）や財政支援のもと、国際教育実習を国内に実装していくことは、日本社会のグローバル化にも対応できることとなり、共生社会や持続可能な社会づくりにつながっていく可能性がある。

2) 総合的な学習の時間の指導法と国際教育実習とを連動させ、教科に関わらず希望するすべての教育実習生がESDやグローバル教育に関する経験をつめるような体制の整備が重要であろう。

3) 今回のように、現職教員を相互に派遣し合うプログラムは、国を越えた相互理解につながり、各国の学校で国際教育実習を受け入れの促進につながる。今後も、相互交流の促進や、受け入れノウハウの発信・普及が望まれる。

4) 今後、国際教育実習を受け入れた実習協力校の現職教員や生徒へのインパクトや、国際教育実習を経験した学生が、教員になり、学生時代の国際経験を学校現場でどのように生かしているのか、また、国際的なネットワークを維持継続しているかといった調査を、中長期的に行っていく必要がある。



皆様方と、未来にむけ、国際教育実習のネットワークを広げていければ幸いです。
ありがとうございました。Terima kasih banyak  Selamat po

Instructional Plan in CULTURE AND ARTS

Name of Teachers: COLLEGE OF EDUCATION CENTRAL LUZON STATE UNIVERSITY PHILIPPINES Learning Area: Culture and Arts		Grade: 10 th Grade Quarter: 3 rd Quarter	Date: February 20, 2023
<u>Title:</u>	“Bamboo Culture and Arts”		
<u>Content Standard:</u>	The students are able to show their understanding towards the Bamboo Culture and Arts in the Philippines and Japan.		
<u>Performance Standard:</u>	The students are able to create Japanese bamboo lanterns which are part of the Japanese Culture		
<u>Competency/ies:</u>	The students are able to adapt to using Bamboo for daily living instead of other materials made up of chemical substances.		
Lesson No.	1&2	Duration/(mins.)	90 minutes
<u>Enabling Learning Objectives</u>	After ninety minutes of interactive learning, the students are expected to:		
	Knowledge	Identify the bamboo and its uses;	
	Skills	Create a Japanese Bamboo Lantern individually	
	Attitude	Realize the importance and benefits of using Bamboo	
<u>Resources/Materials Needed</u>	Materials: Visual Aids (PowerPoint Presentation, Worksheets) Laptop Driller Bamboo Banner (Activity Material)		
	References: <ul style="list-style-type: none"> ● Sustainable Bamboo Development book (page 1-8) 		
<i>Preparations</i>	Introductory Activity (Optional) a. Routine Activities (5 minutes)	Greetings Checking of Attendance Announcements	
	b. Motivation/Attention (5 minutes)	The teachers will show some descriptions of the Bamboo that are facts or bluffs. The students will answer by raising the banner of their answers.	

		<p>Objective:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● To prepare the students for a new lesson. ● To introduce and give a glimpse into the topic.
<i>Presentation</i>		<p>Abstraction (25 minutes)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● The teacher will show some facts about bamboo while doing the Gamification. ● Discuss the uses of bamboo, and ask the students for more ideas and examples. ● The teacher will show how Filipinos use bamboo as part of the culture <ul style="list-style-type: none"> ○ Tinikling ○ Bamboo Ensembles ○ Bahay Kubo ● The teacher will show how the Japanese use bamboo as part of the culture <ul style="list-style-type: none"> ○ Bamboo Lanterns ● The teacher will discuss why the students must choose to use bamboo instead of the other materials. <ul style="list-style-type: none"> ○ discuss the negative effects of plastics and metals to the environment and to the people. <p>(10 minutes)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● The teacher will discuss and demonstrate how to make a bamboo lantern.
<i>Practice</i>	Application (2nd Period) (35 minutes)	<ul style="list-style-type: none"> ● The students will create their own personal Japanese Bamboo Lantern to be facilitated by the student-teachers and the Supervisor.
	Evaluation and Generalization (10 minutes)	<ul style="list-style-type: none"> ● Question and Answer ● Summarizing the theme of the lesson ● Giving os Assignments <ul style="list-style-type: none"> ○ The teacher will give a task the students to make a Reflection Paper with a minimum of 100 words to be submitted at the next meeting.
Remarks		



PILOT BATCH 2 STUDENT TEACHER EVALUATION FORM

For use by both the cooperating teacher and university supervisor

Student Name _____

Sending University Central Luzon State University **City** Science City of Muñoz **Country** Philippines

Receiving University University of Tsukuba **City** Tsukuba **Country** Japan

Receiving School Senior High School at Sakado,
University of Tsukuba **City** Sakado **Country** Japan

Subject Teaching _____ **Grade Level** Grade 10, 1st years

Evaluator Name / Mentor Name _____

- Directions:**
- This evaluation form should fill-out by the mentor together with cooperating teacher per subject only.
 - Please fill this evaluation form according to the class levels and subjects that student's teacher taught.
 - For each criterion, please assess the student teacher's level of competence based on your observations and experience with the student. Please provide your assessment by using the following assessment scale. Also provide any specific examples or suggestions for the student teacher. Please remember that the **Competencies evaluated on this form are based on comparisons with the performance of other student teachers, not with those of experienced teachers.**
 - This evaluation form have to be sealed by the **receiving university**.
 - The coordinator of **receiving university** have to return the completed form to the partner university directly via email.

Note:

Assessment Scale: **4 – Advance.** *Consistently exceeds* expectations
 3 – Proficient. *Consistently meets* expectations
 2 – Basic. *Partially meets* expectations
 1 – Needs Improvement. Needs focused attention

Did the student teacher submit the lesson plan before teaching? Yes No

PART 1: TEACHING PERFORMANCES

I. Content and organization of instruction

No.	Criteria	4 Advanced	3 Proficient	2 Basic	1 Needs Improvement
1	Knowledge of Subject Matter The student teacher knows the subjects they are teaching, understands the central concepts, tools of inquiry, structures of the discipline(s) he or she teaches and can create learning experiences that make these aspects of subject matter meaningful for students.				
2	Focus on Objective of the Lesson The student teacher organizes and plans systematic instruction based upon knowledge of subject matter, pupils, and curriculum goals.				
3	Knowledge of How Students Learn The student teacher understands how the learners differ in their approaches to learning and the barriers that impede learning and				

No.	Criteria	4 Advanced	3 Proficient	2 Basic	1 Needs Improvement
	can adapt instructions to meet the diverse needs of learners, including those with disabilities and exceptionalities.				
4	Assessment of the Lessons The student teacher understands and uses formal and informal assessment strategies to evaluate and ensure the continuous intellectual, social, and physical development of the pupil.				

Comments on her/his strengths or weaknesses to improve in content and organization of instruction:

II. Strategies and skills for effective instruction

No.	Criteria	4 Advanced	3 Proficient	2 Basic	1 Needs Improvement
1	Instructional Strategies The student teacher uses a variety of instructional strategies, including the use of technology and other teaching aids, to encourage learners' development of critical thinking, problem solving, and performance skills.				
2	Communicative The student teacher uses effective verbal and nonverbal communication techniques as well as instructional media and technology to foster active inquiry, collaboration, and supportive interaction in the classroom.				
3	Classroom Management The student teacher manifests understanding of individual and group motivation and behavior to create a learning environment that encourages positive social interaction, active engagement in learning, and self-motivation and able to organizes time and resources into a learning environment that enable learners to learn in an equitable way.				
4	Overcome Discipline Problems The student teacher attends to learners' misbehavior in a positive manner; promotes self-esteem, responsibility, and mutual respect.				

Comments on her/his strengths or weaknesses to improve in strategies and skills for effective instruction:

PART 2: GENERAL PERFORMANCES

III. Personal Characteristics

No.	Criteria	4 Advanced	3 Proficient	2 Basic	1 Needs Improvement
	The student teacher was able to				
1	Demonstrate resourcefulness.				
2	Show initiative during exchange period.				
3	Demonstrate thoughtfulness of judgment.				
4	Work with enthusiasm and a positive outlook.				
5	Demonstrate patience.				
6	Demonstrate good manners, discipline, and respect.				
7	Develop good relations with students, peers, teachers, and administrators.				
8	Show professionalism in all areas.				

Supervisor's/Mentor's signature _____ Date _____

Cooperating Teacher's signature _____ Date _____



令和4年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
教職員交流を通じた国際比較研究事業

ESD for 2030 を担う教員養成のための
国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究

編集・発行 国立大学法人 筑波大学
附属学校教育局・附属坂戸高等学校

本報告書は、文部科学省の委託事業として、筑波大学が実施した令和4年度「新時代の教育のための国際協働プログラム（教員交流）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。